

---

# まぐろ剣士 -Rein:carnation-

ゆり†

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

まぐろ剣士 -Rein:carnation-

### 【ZPDF】

Z5708V

### 【作者名】

ゆり+

### 【あらすじ】

劣等生の一撃の続きです

## プロローグ

これは去年の話

夏、私は人を殺してしまいました

まだ幼い子どもを、兄の目の前で車で撥ねてしまつたんです

気づいたときには、それはそれはむじに死にざまを子どもに与えて  
しました

少年は泣き崩れ、突如として成り果て折れ曲がった死体の脇で、必  
死に散つた弟の血をかき集めていました

ぼてりと転がつた赤黒い肉塊を痛く痛く抱きしめて、泣いていました  
イヤの摩れる音よりもずっと、それは耳にいつまでも響いていま  
した

なぜあのときブレー キを踏まなかつたのか  
なぜ逃げたのか

なぜ、一年もの歳月、こんな事になつてしまつたのか

……

今を語る前に、そのお話を、こんな人殺しに成りえた私の過去を語  
ります

.....

\* \* \*

父親はいなかつた

小学生のころ、気がつくと私の家庭は離婚していた

聖蹟桜ヶ丘の小さなアパートに住んでいた

母親は優しく、周囲にも愛想良く、そして弱音も吐かず影では強い  
人だつた

身体は細く、肌は白く、長い髪は見るからにさらさらだつた  
大きくはない声で、たいへん嬉しそうに小さな私の隣に立つ姿をよ  
く覚えている

穏やかな物言いに幸せそうな屈託のない笑顔をいつも私に向けていた

しかし当時の私にはそれは「コンプレックスの固まり」でしかなかつた

自分自身が不安で弱くて、家庭にコンプレックスを抱いていた

けれどもそれと真逆の母と歩くと、そのときほど恥ずかしくみすぼ  
らしいと感じるときはなかつた

母はずつと、女手一つで私を育ててくれました

裕福ではなかつたに違ひない、しかし当時はそれを実感することは少なかつた

何不自由なく平穩な生活を小学生の私に、人生を削つて全てを注ぎ、  
尽くしてくれました

毎朝早朝出でいく母が日常の一つの習慣のように、当たり前と感じ  
ていた

週二の休み以外、母は自分が眠つたずっと後に、日付も変わつたず  
つと後に、帰つてくるのだった

そして、"J飯の支度と歯磨きだけをしてまた出でいくのだった

私に見つからないよう、仕事終わりのスーパーで買った惣菜は、全  
て半額シールを剥がして置いていきました

休みの日は休みではなく家事を一日かけて、自転車一つでやつての  
けました

そんな環境とは裏腹に、私は高校生になると、いわゆる不良になつた  
他人が見て不良とわかる不良ではなく

タバコも酒も暴力もバイクもない

シャツを出す程度の、誰とも関わらない不良だった

とにかく友達がいなかつた

朝や昼休み、体育の授業や行事には決まって出なかつた、参加しな  
かつた

そういう、不良だった

誰もが自然に身につく愛想笑いも上達しなかった、色々な事が劣つ  
ていて

たまに学力で明確な馬鹿な事が皆に見つかると、休み時間にスラッ  
クスのポケットにテストの用紙を折つて隠して教室から消えた

カバンの中を漁られることがあったから

いじめではなかつたが、嫌われてもいなかつたが、孤独だった

私はそういうときは決まって屋上に逃げた  
扉からは入れないが、私だけが入る方法を知つていた

最上階に普段使われていない教室があつた

そこには非常階段に通じる扉があり、開けると非常階段から屋上に  
行くことが出来た

一応、赤錆だらけの安い鍵のついた薄いフェンスの扉はあつたが、  
蹴つてみると鍵は壊れてぼろぼろと落ちた

私は屋上の空気が大好きだった

こんなに生徒で溢れている空間の頂上を独り占めできた事に  
すし詰めの箱とは違う、空に一番近くで開放的な空間にだ

両手を広げて、目を閉じて、両耳を開けた

この日の感動は忘れない

教室から屋上へ行く日常は続き、そして私の人生に転機が訪れる

ある夏休みの夜のこと

テレビで「スタンドバイミー」という映画を見た  
すると私はどうしても真夏の誰もいない屋上に駆け上がりたくなつた  
制服を着て、携帯をしまつて、自転車をガラガラ鳴らして学校に  
人向かつた

行き着いた、飾りのよくな薄いフェンスの扉を開けると

先客がいた、それも三人も

それが私達の出会いだつた

「でもいそな冴えない顔の 五十嵐 日向

茶色の髪に前髪をヘアピンで止めた背の高い 羽鳥 康介

真面目そつな面に黒ぶち眼鏡にさりさりの髪の 中島 京

その中央には天体望遠鏡が空を向いていた

「天文部、別名、青春部だと言われた

「いつもこいつもこの学校の省られ者だつた  
似た者同士だつた

帰ろうとしたが、空気を悟られてしまった

屋上に来る人間は、みな理由は同じ、決まって同じ孤独の住人だつた

銀河のほとりで、私は久しぶりにばか笑いできた気がした

私は、友達が出来た

その夏、ハケ岳にある田向のいとこのおじさんの別荘に行つたり  
男四人で調布の花火大会にも行つたり

天体望遠鏡を担いで色々な場所に行つた  
青春をおうかした

そんな風にして、高校三年生の夏になった

受験と進路を控えた周りなど気にせず、私は最後の夏を過ごしていた  
ハケ岳の別荘に今年も行く予定を控え、それと合わせて皆でお金を  
出しあって新しい天体望遠鏡を買おうとしていたときだつた

私は、初めて母と喧嘩をした

久しぶりに母と話した

気がつくと、私は母の身長をずっと越えていた

母は、数本白髪を蓄えていた

リビングの小さなテーブルに座り、母は面と向かって進路について  
聞いた

私は頭が良くなく、かといって夢や目標があるわけでもなかつた

ただ部活に夢中に、だらだらと学校生活を過ごしてしまつていた

母は何も悪いことは言つていなかつた

まつといで出した道を選んでほしこと心の底から考えてくれていた

けれどもそんなことは知らず、田の前に輝く夜空だけを見続けた反抗期の、全く思いのままに生きる私は

かつとなつて、決して親に言つてはいけないその言葉を、容赦なく真正面から怒鳴ってしまった

「誰がこんな家に好きで生まれたかよッ！…」

「お前みてえな親いらねえんだよッ！…早く死んじまえよッ！…」

母の心を踏みにじりてしまった

育ってきた息子に言われたその言葉は、死ぬほどじつかつたに違いない

しかし母は表情も変えず、知らぬ間に、そんな私の為にまた薄暗い街へと出でていくのだった

ろくでもない私はそんなことをお構い無しに、母の大切に貯めていた生活費の入つた封筒から天体望遠鏡のお金をくすねた

何も言わず、母と絶交する覚悟で、怒られるのを覚悟で

しかし勝手気ままに別荘から帰つてくると

その夜も変わらず、半額シールの剥がされた惣菜と白米が炊かれていた

そんな母の重みに気がつかず、私は何度も気持ちをお粗末にし続け

てきた

後に知ったが、母はそのときずっと働いていた仕事をクビになつて非常に大変な状況だつたらしい働き口を必死になつて探していたのだった

何も知らず、私は高校を卒業した、天文部のメンバーもそれぞれ進路を決めた

私はバイトを掛け持ちして一人暮らしを始めた

母のいるあの小さなアパートから早く出ていきたかった

せいせいした、誰に何も言わることのない自由を手に入れたのだけつた

だが、それも長続きはしなかつた

携帯代と家賃、あとはご飯はカップラーメンにでもすれば平氣だろうなんて

そんな風に安易に考えいたことがそもそも間違いだった

光熱費はもちろん、高い水道代もガス代も、更には保険まで、全部大人の私が一人で払わなければいけないのだ

一人暮らしなのだから、当たり前のことだった

夢もなく、毎日がやみくもなバイト漬けだけの日常になつた

大学生のように飲みにも行けず、洋服も買えず、髪を切るお金も満足に作れなかつた

私が風邪で体調を崩した月、母に家賃や光熱費を払つてもらつた

私は、何も知らず一人で社会に出て、自分の甘さを痛いほど知つた

今まで誰にここまで養つてもらつたのか

誰に育てられて、ここまで健康に育つってきたのか

まるで一人で生きてきたかのような振る舞いしかせず

私は大馬鹿者だった

その夜、母が置いていった肉じゃがを一人で食べて泣いた

おふくろの味が染み込んだじゃがいもを頬張つて、小さな一部屋の中でおいおい泣いた

私は恥を知つて、母のいる生まれ育つたアパートに帰つてきた

しかし母は変わらず、おかえりと、全てを許して微笑んでくれたの

だった

喜ぶ母は、少し瘦せていた

今までの親不孝な生活を取り戻すように、私は母を大切にした

けれども私は、仕事から帰つてくる母に布団を敷いてあげることくらいしか出来なかつた

そして、そんな無力だった私はようやく遅く、夢を見つけたのだった

‘多摩市議会議員’

生まれ育ったこの街、色々な事があり学んできたこの街で仕事がしたかった

より良い街にと、恩返しがしたかった

そこからは、死に物狂いで頑張った

出来るだけ母の負担が減るように、バイトをしながら独学で勉強した

そして、遂に私は夢を叶えた

同じ仕事場で出会った同じ年の彼女と一年の交際の末、結婚もした

初めて孫娘を見た母の顔はそれはそれは嬉しそうだった

これでよみがへ親孝行が出来る

一端の社会人になれた

……そんなときだった

……おふくろが倒れた

まるで私への罰なのだろうか

今までの無理がたたつた、過労だった、ボロボロだった

小さなこぶしに隣にいた大きな母は、小さく、顔にはおばあちゃんのよつのシワを刻んでいた

私が三十歳の夏のことだった

そして医師に言われた、癌だと……末期だと

余命は一年、そう宣告された

絶望だった、私は足から崩れ落ちた、意識がブツリと切れそうになつた

その日の帰り、天文部の三人を乗せた車で泣きながら帰る途中

追い討ちをかけるように

……子どもを轢いてしまった

人を殺してしまった

それから一年間、私と母を知る三人の協力により

最期まで、この事実を隠すことになった

申し訳なくて……申し訳なさすぎて

全てを捧げて一身に私を育ててくれた母に

最後に渡すものが、あなたの息子さんは人を殺したんですよ

そんな風に刑事に問い合わせられて、そんなしわくちゃの顔で、ベッドの上で一人悲しく悲痛に最期をむかえるなんて

考えたくなかつた……最後まで親不孝者の私でも

だから、この隠蔽を泣きながら謀つた

一年後、一番の被害者の彼は黒いコートを着て刃物を握つてやつて  
きた

あの日の少年とは豹変して、恐ろしい憎悪を纏つて私達の前に現れ  
たのだった

まさかと思つた、身の毛がよだつほど恐ろしかつた

三人とも、次々に腕を斬られて病院送りになつた

彼は関係のない警察官まで巻き込んで斬つた  
人を殺すのも時間の問題だと感じた

おふくろの容態は医者が言つたそのままに、この三ヶ月で悪化した  
髪は細く抜け落ち、頬はこけ、いつ息をひきとつてもおかしくなか  
つた

ただ願つた、できるだけ、一日でも長く生きて欲しかつた  
生まれてよかつたと、いい人生だつたと、私を産んでよかつたと

そう心から思つて最期をむかえて欲しかつた

……だが

それを前に、私は更に犠牲者を出してしまつた

高校生だった、それも五人

どこにでもいる田の綺麗な高校生だった

それは、いつかの私達を思い出させた  
まだ幼くて、武器も持たずに戦えた  
毎日を青春時代に生きる少女達だった

いつの間にか、私は大人になっていた  
こんなにも…汚れてしまっていた

あと一ヶ月、あと一週間

その私の気持ちは揺らいだ  
しかし未練はあった

根源の犠牲者である彼を逮捕することは出来ない

私は、彼女を前に言ってしまった

だから、こんな選択を選んでしまったのだ

.....

これが、現在に至るまでの私の、この街に渦巻く罪の犯罪者の、  
人の男の人生です

母が人生をかけて愛を注ぎ、惜しみなく女手一つで育てた馬鹿息子  
です

母を想い、親孝行をしようと努力した男です

人を殺し、それを隠蔽し、被害者の男の子を封じ込めた、全く卑劣な人殺しの大人の姿です

## 第1話

花火大会の末、ウィッチの正体を知った  
天体観測の末、ウィッチの痛みを知った

生涯最高の旅路の果て、望んでいた現実とは違う方向へ、世界は変わった

答えも基準もない、理解する事も困難な飢えた真実は、最終戦を迎えるようとしている

社会の壁に打ちのめされ、弾かれるように散ったあの日から数日

真夏に起こした一週間の奇跡のその後

僅かに歪んだ内側を除いた大変素晴らしい世界で、何も知らないその他と同様

身をもつて全てを知った皆もまた  
すっかり大人しく、タイムリミットもない当然の日常に戻っていた  
のだった

selling dayという名の、作戦という名の

共有と対カルマの部活動も消えて

- 9月25日 - (木) -

停学期間終了日 27日(土) 昨日まで、今日を入れて残り一日になった

お昼前に起きると、外は梅雨のような雨が降っていた

じめつとした湿気を街に『え、洗い流すといつよつは汚してくるよ  
うな灰色の雨だった

当分は止みそうにないそれを窓から見つめ、寝すぎの氣だるさに  
人ベッドから起きる

「……長いなあ」

十日というのは、何もしない人間にはこんなにも長いものなのだろうか

朝起きる必要もなく、退屈で仕方がない、ずる休みしたよつた氣分  
だった

今いり、他の生徒は当たり前に授業を受けているはず

皆は家でどうしているのだろう

そんなことをまた頭にボーッと浮かべて、部屋着のまま携帯だけを  
ポケットにしまう

部屋の扉を開け、一階に降りる

すでにおここの姿はなくなっていた

お昼だとここの、分厚い曇のせいでリビングはどんなより薄暗い

電気をつけ、空腹感もなく、ただテレビをつけた

平日のお昼に見たいものなどない  
ニコースもウイッチの話題はすっかり消え去っていた

「……はあ」

家にあつたDVDも、ゲームも、パソコンでの動画鑑賞もさすがに  
飽きてしまった

携帯と睨めっこか、おにいの部屋の漫画を漁るか、BUMPのアル  
バムを聞く事くらいしか有り余る時間を潰す方法はなかつた

冷蔵庫の中のプリンを食べた後、私はまた部屋に戻つた

懲りもせず降り続く雨音だけが響く暗い部屋

苦い空気を薄く吸い、ベッドの隅っこに丸まつて座り、窓一枚越し  
にかりそめの平和な世界を覗く

iPodのイヤホンを両耳にはめて、物思いにふける

（今頃ハルはどうしているのかなあ）

考える事はまだそれだ

もういい加減忘れないといけないのに

どうしたって、考える事はそれだ

一週間の青春の呆氣ない結末だ

あのが本当の終わり、あれば中途半端などではない  
私達は夢を叶えだし、やれるだけやつた

何度もそつやつて未練がまし感情を封じ込める

「……ハル」

携帯を握りしめ、水槽のよつた窓から遠く空を見上げると、またあの田の衝動が田を覚ますようにうずく

携帯を開き、何の氣なしに灯のアドレス宛にメールを作成した

-本文-

「灯 元氣ー？ 今日は雨だね

：関係ないんだけど、変な意味じゃないんだけど

なんていうか、本当に、このまま終わつていいくのかな？ いいと思

う？

急にいきなり変なこと、「めん またね」

……

成り行きで書いたはいいものの、送信するのに十分以上悩んでしま

つた

やつとの末、何回も読み返して、ようやく私は灯に送信した

しばらくして、携帯がバイブで鳴った

開くと、灯からメールが届いていた

-本文-

「雨さねー 秋つてカエルいんのかな?

やれるもんならやりたいけど、残念だけど終わつたんわよ、あたし  
らはー」

上下の内容になんとも格差を感じながら、灯からの文章を読んだ

(……終わった、やつぱり、そつだよね 当たり前だよね)

でも、やりたいけど、といつ言葉に、少なからず灯もつつかかりを  
残しているようだつた

少しだけその文章にやりきれない冷たさを感じた

「…………」

それ以上の返信は送らず、私は無氣力に携帯を辺りに放り投げた

「…………ライブかあ」

あれだけ楽しみにしていたライブなのに、今すぐにでも行きたいと  
いう気持ちはなぜか薄れてしまつて いる自分がいた

続けて、次はひよりにメールをした

解答は、灯と同じだった

有珠にもメールをした

「これまた返信は同じだった

結果、送る前より虚しくなつただけだった

抜け殻のような妙に寂しい気持ちを増しただけだった

予定のない空白の午後に、何の密度もない時間は進む

夢の後と呼べるのか怪しい感情は

ひたすらゆつくりと、雨模様の隅っこで流れていくのだった

.....

明日の予定も、とくにない

\* \* \*

・9月26日・（金）・

正午過ぎ、今日も起きると雨が降つていた

昨日と同じ類いの、どんよりじつとした雨だった

沈んだ街並みを窓から見て、またため息がこぼれる

少しだけ風邪っぽかった

リビングにあつたあんパンだけを取つて、また電気も点けずに部屋に引き籠もつた

長い長い停学の間で、徐々に私の中で、行つてはいけない選択へ進む方向に変わりかけていた

日常の延長にライブに行くか

日常を捨て、ハルを助けるか

社会的に一度犯した過ち、家族や関係のない人まで巻き込んだ大事件をまたするのか

もうアマリリスの能力も私にはないんだぞ？

見つかれば、それこそ今度はきっと退学になるんだぞ？

（ねえ……どうすればいい？ 灯）

真剣な面持ちで、懲りずに私はまた灯に昨日のようなメールを送った

少しだけ意志を前に出した文章を

-本文-

「灯、やつぱり私はこのままの気持ちでライブに行くのは、なんか嫌だな

ハルを助けたいって、思つことは本当に間違いなのかな？」

きつかけや、先導や、後押しや、きつとそういう気持ちが欲しかった

自分は正しいと、一歩進み出す決断がしたかったんだ

けれど、そのメールの返信は、何分何時間経つても返つて貰うこと  
はなかつた

数え出してからいくつめかわからない、雨粒が垂れる窓を見つめな  
がら携帯を握りしめていた

震動が来るのを待ち望んでいた

…しかし、携帯が震えることは一度となかつた

ひょりと有珠にも、奏にまで躊躇しながらも送つてみた

なぜなんだろう、一人からも、奏まで、まるで無視するよつにメー  
ルが返つてくることはなかつた

（……）

やつぱり呆れられちゃつたのかな  
往生際が悪いって、うつとうしかつたのかな

そう思われちゃつたのかな

（…それが、皆からの宣誓なのかな ）

だめな事、やつぱりの選択はいけない事

ハルは切り捨てる、見捨てなくちゃいけないって、そういう事なんか

私の考えは所詮はおせつかこの、でしゃばりなのかな

その瞬間、歯が、ずっと遠くに行ってしまった気がした……

やつぱり、夢と現実の狭間で悩み苦しむ葛藤の中で

停学は、ついに最後の一戻を迎えるのだった

・9月27日・（土）・停学終了日

決断の選択が迫った当日

少しだけ蒸し暑い朝だった

昨日まで降っていた重い雨は小降りになつて  
午後にもなればすっかり晴れた月明かりが見れそうな、そんな天氣  
だった

（……？）

むくじと起きると、鍵のかかった部屋の向こうから料理をする音と  
油の匂いがしていた

おにいが鼻歌交じりに朝ごはんを作っていた

だらしないあくびを一回して、もそももと身体を伸ばして充電器に  
刺しちばなしの携帯を開く

（……やっぱり）

予想通り、受信も着信の表示もない

リアクションもなく、起きたばかりの布団に顔を突つ伏せる

その数分後だった、意識もはつきりした頃だらうか

そんな穏やかな朝のヒトコマを

トウルルルルツ！！

唐突に、一本の電話がつんざいた  
一階の家の固定電話からだつた

不安がよぎり、それはじとじとへ的中した

おこいが多磨中央警察署に呼ばれたのだった

理由は他ならない、私の犯した責任と謝罪、尻拭いの為だった

おこいは一階に上がり、一事一事扉越しに話し  
何もとやかく言つ事なく、せつかくの休日を潰して出向こうといった

（……）

すぐに罪悪感が胸を覆い、扉を開けることも返事をえもすることも  
氣まずくて出来なかつた

……

ガチャリと家のドアが閉まる音が響き、私も部屋の扉から俯きなが  
ら出た

頭だけを出るようにして出で、探るように辺りを見渡してから部屋の  
外に出る

トイレに行つた後、ため息交じりに電気の点いたままのコンピングに  
向かうと

「……あ

玉子焼きとワインナーが乗ったお皿が、テーブルの上にラップを被せて並べられていた

その横には、小さなメモが添えられていた

「『飯は炊飯器の中に炊いてあるから、朝はそれ食べて

遅くとも夜ご飯には帰つてくるから』

ボールペンの柔らかい字で、そう書かれていた

包まれていたラップを剥がし、私はお茶碗にご飯をよそつ

「……いただきます

誰もいない食卓の中心で、私は手を合わせて朝ごはんを食べた

玉子焼きは甘口で、ワインナーは少し焼きすぎていた

温かくて、とっても美味しかった

そしてとてもなく……申し訳なかつた

\* \* \*

(もう夕方……)

夕方過ぎ、すっかり空も夜の表情に変わっていた

電気も点けずに、小さな呼吸のリズムが響く部屋の片隅に私は相変わらずいた

その中には唯一携帯の四角い光だけが揺れている

アルバムをめくるように、私はハルとのメールを読み返していた  
たった数通交わしただけのメールにも、何度も読み返すと、この数日で育んだ色んなことが思い出せた

携帯を拾ったとき

ハルと弟の関係を知ったとき

ハルにハルと呼んでほしいと言われたとき

それと同時に、その隅で脳裏に焼きついたハンバーグを泣きながら食べていた姿が巡っていた

桐島さんの気持ちも言い分も分かっていた

でも、私はやっぱりハルを助けてあげたかった

同じ体温を持った境遇の持ち主を、他人事には思えなかつたカルマから

一度は成し遂げられなかつた、殺さない、という選択にだけでも導いてあげたかった

けれどもそれを使れば、ライブに行く事はきっと叶わない

以前のように街を敵に回し、全てをなくす結果になるかもしけない

それほどの代償と犠牲を生む覚悟は

悔しいけど、……今の私にはない

私だって、所詮自分が一番大事なんだ  
ただの平均以下の一人の高校生なんだ

‘どれか一つを手にすれば、どれか一つを必ず壊す、それがこの街  
の現状

(……)

悔しいほど実感した

でも、そんなものを絶対に認めたくない

出会った一人の人生が潰れる瞬間を、指をくわえて、ライブ会場で  
笑いながら感じていたくなんかない

ハルは犯罪者になるような人じゃないんだ  
私達と同じように、人の痛みがわかるとつても優しい高校生なんだよ

形は違くても、同類なんだよ、

(ハルを助けたい……)

晴れて皆とライブに行きたい……  
でもどちらか一方しか選べない

……

「う……っ、ヒクッ……もう……どうしたら……いいのっ

」

『気がつくと、心がじよじよと泣いていた

心の形を剥き出しにして、ひどく唇を震わせていた

雨音に混じつてぼたりぼたりと両耳からじぼれ落ちていた

「ぐすり… つ わがままのかな… ツ やっぱり… 」

結果が出た後に後悔だけはしたくない、もつと頑張つてればなんて絶対思いたくない

こんな結末 夢にまで見たものじゃない、まだきっと栄光の夢への途中なんだ

終わりなんかじゃないんだ

じたばた努力すれば、もう一度本氣を出せば、もつと変われるかもしれない

（戦いたい… もう一度戦いたいよ… ツ皆 ）

受信のない、一週間分の汗と涙が染み込んだ携帯電話に水滴を落とす

ガチャツ

そのときだった、家のドアが開く音がした

私の不始末を終えたおにいが帰ってきたのだった

(……)

一瞬で、現実に引き戻された

現在地を突きつけられた

今でさえ迷惑をかけてるのに、これ以上また懲りもせず周りの人には迷惑をかけるのか？

(……)

……」こらが、潮時なかもしれない

いい加減、夢見た子どもからは田覚めろって事なのかもしれない  
他の大人のように、困難な現実からは田をつぶれということなのかもしれない

(頑張つて、私もその大人の一員にならないといけないのかな：)

叶つたはずの未来はすっかり敗北感を滲ませていた

部屋中に生乾きのような湿気の臭いがまとわりつき、何もない萎れて干からびた日常と、ずつしりした空気が胸を冷たく圧迫していた

……

夜も更けた頃

まだ、小さな悲鳴にも似た涙声は響いていた

じつと息を押し殺して戦つように続いていた

からっぽの押し入れ  
壁にかけられた制服

未だ何も表示されていない携帯の画面

胸が裂けるような痛みが貫き、膝を抱えて身体を軋むほど丸める

誤魔化して生きたくない  
知らんぷりもしたくない

(……頑張りたいのにッ )

許されない、いけないこと、間違い

「……うつ……あッ」

両手を爪が食い込むほど握り、歯を噛み込んだ  
切れるほど唇を噛み、人には見せられないぐちゃぐちゃな顔をして  
泣いた

冷たい夜に、壁際に背を押しつけて……自分の中と戦つていた

その瞬間だった

「ゆり、ちょっとといいか

」

(……ビクッ )

突然、おにいが閉じ籠っていた私の部屋の前に立ち止まつた

「ツ……ぐすり」

はつとして、泣き声を殺して私は黙り込んだ

「……」

足音が遠ざかるとともに、鍵のかかった扉を挟んで少しの間が生まれた

そして、おにいは静かに口を開いた

息を飲むように、心を落ち着かせて言った

「ゆりが今何をやつてゐるのか、何を追つてゐるのかは俺は分からぬけど」

「もしここで仲間と一緒にやり終えてないことがあるなら、やり残したことがあるなら、俺や周りの人間のことなんか気にすんな」

「……ひー」

思わず言葉に詰まりきつていた気持ちが揺らいだ

「もしお前が最後までやりたいことがあるなら、いへりでも迷惑なんかかける」

「……うつ……ひくつ」

強かつた、どの言葉も私を前へ立ち直らせた

「大人になつた後の後悔や失敗は確かに恥だ けどな、若いころの後悔や失敗は宝だ」

「何も知らず仲間と共にぶつかれる挑戦は、今のお前達のころにしかできない」

黙り込む私へ向けて、頑丈な扉の向こうからおにいは続けた

「今、いっぱい失敗しなさい、いっぱい悩んで、そして努力しなさい」

「最後まで、やりなさい」

「……うつ……ッ」

思わず大粒の涙が溢れてきた、感動するほどたまらなく嬉しかった泣いてることなんて始めから気がつかれてるのに、胸が苦しくなるほど感謝に震える息を殺した

そして

「……はいッ……！」

感きわまつたずるずるの鼻声で、これでもかと精一杯の大声で返事をした

おにいは全てを見透かしていた、これほどの迷惑をかけたのに嬉しそうな吐息だつた

家族として持てる全てを預けてくれた

背中を押してくれた

そして、おにいは最後に付け加えたように恐らく、その為に、私に言った

大事な、本当に決定的な事を呟いた

「やうこや……玄関の前で、お前の、友達、が待ってるぞ」

「えツー？」

思わず言葉に耳を疑つた  
赤く腫れた瞳を見開いた

その瞬間、今自分が立っているシチュエーションを理解した

気がつくと思考より先に私は一心不乱に立ち上がりついていた

今まで籠つていたのが嘘のように軽い身体で  
身を乗り出して部屋の扉の前に立つていた

（…はあ…はあ…）

ドクンッ

「」を開ければ、もう一度戻る」とは出来ない

ドクンッ！

「」を開ければ、世界はまた敵となり振り出しに戻る

ドクンッ！！

「」を開ければ、世界はまた変わることが出来る

開けるんだ！ 変わるんだッ！ 私達の夏ヘッ！

一度破れたこの街のカルマを今度こそ解消してみせるんだ

（戻りう、私の主戦場へ ）

そして、十日間引き籠っていた扉を

（行けええええッ！！ ）

胸を張つて、私達の、夏へと通じる扉、を勢いよく派手にぶち開けた

私は、答えを見つけた

ふと見た空は、このとこの降り続いていた雨もすっかり綺麗にあがつて

声援を送るよつて、澄みきつた濃い空が月明かりを部屋を照りして  
いた

新たな青春がはじまった

固く閉ざされていた扉を開くと、通路のすぐ脇にはおにいが立っていた

「いってこい」

視線は合わせず、代わりにただ一言、そう深く私を後押しした

（おにい… ありがと…）

思わず涙を右腕で拭つた

あんなに苦しかった日々が嘘みたいだ

言いたいことは山ほどあった、感謝も謝罪も迷惑も…  
でも分かりきったありがと「めんは連呼せず、私は頭を上げて  
深く頷いた

言葉数少なく瞳に涙を浮かべて、その一言にありつたけの感謝を込めて述べた

「行つてきます… つ」

そして、仲間の待つ扉を目指して走り出した

駆け出したその背には、微かにポソリと、…「れでいい」と  
見送る家族の優しい声が一人言のように聞こえてきた気がした

＊  
＊  
＊

玄関めがけて一直線のスピードは加速していく

充実した躍動感に身を浸して、手加減なしに真っ直ぐ伸びた両足が階段を叩いていく

なまけきっていた身体中の細胞が久しぶりの活路にウスウス沸き立つていた

「まあ…まあツ」

ずつとつきまとつていていた背中の重みも、何の突つかかりもなかつた  
退屈な日常はどうやら

もつたいたいくらいの衝動感が真夜中の空気を清々しく一変させた  
十日間のブランクを全く感じさせない軽い足がなりふり構わず目的  
地めがけて突っ走つていく

素足のまま階段を大げさに一段飛びして、つまづきやうになつても前へ前へ走る

久しぶりに感じたこの鼓動の高鳴りが、肺を内側から引っ張られる  
ようなこの脈動感が

たまらなく嬉しい ツ！

変えてやるんだ、ここからやつ一度変えてやるんだ!、必ず辿り着くんだ!

終わりたくないんだあッ！

そう身体中がバラバラになるほど叫んでいた

涙を浮かべていた瞳はすっかりビー玉のような光を得て、息を吐く  
唇は無性にワクワクして笑みを作っていた

そして

息を切らしてつまづきながら家の扉に手を伸ばすと

前屈みのままガチャリと重く頑丈な扉を開けると

弾けた視界の先には

「なんだ、全然しょぼくれてないじゃん」「

「ああ」「

「リハビリだ！」ゆりつ「

ベールを剥ぐと、灯の甲高い叫びが鼓膜を震わせた

雨上がりの空はこんなにも大胆に塗りつぶされた

目を凝らすと、広大な夜空のパノラマをシルエットで、制服姿の四人組が家の前に乗り込んで立っていた

悪巧みに一ヶ「リ笑う栗色の癖つ毛のリーダー

その横にはふふつと微笑むカーティガンを着た背の高い根暗少女  
天使のよつなあどけない笑みを浮かべてしゃがむ小さな純白の女の子  
ブスツと無表情で三人の脇に少しだけ身体を逸らして立つ夜の住人  
のよつなミステリアス娘

「嘘…ぢつして」

雨上がりの月明かりの下、反逆の旗を掲げるよつに四人が絵になつて揃つっていた

「決して悪くもない未来だつたんをけどなー、でもずっと四人で昨日考えてたらわ」

「なんかやり残した事があるつていうか、あたしらもさ、ゆりのメール読んでやつぱりこのまま大人しくこんなんで終わるのは嫌だつて、負けっぱなしは嫌だつて、そう思つちやつたんさよ 馬鹿だから

すると、四人は懐からもぞもぞと取り出して、それを私の前に見せつけた

「だから、あたしらはもう一度、痛みを共有する」

その手には、なんと退学届が握られていた

「もじだめなら退学してやるつていう覚悟の、共有の契約書、みた

いなもんだ

「……それって！？」

「　　sellin g day　再結成だッ！！

「…ッ！」

鳥肌が立つた、全身がそのフレーズに凍れた

「ここまできたら最後の最後まで付き合いますよ」

ひよりが長い髪をなびかせて不敵に微笑んで言つた

「もう一度、僕も逆ひりのです！」

銀色の髪と青色の瞳の少女の僕も田を輝かせて続いた

「…………」

奏のほうを見ると、ジト目まま一度だけ頷いた

「でつかい事してやるひりザッ！　学生生活を賭けた大博打だ」

「…………ぐすつ」

泣き終えたはずの涙が、またじわりと滲んで溢れてきた

「…………馬鹿つ」

嬉しくて嬉しくて、無防備に流れるそれを隠すように、照れ隠しこ

私は瞳を前髪で伏せた

言葉とは裏腹に、田の前の灯は単純なほど満足げに笑っていた

（…でも…）

「嘘…ライブは…?、ライブはどうあるの?、まさか諦めちゃうの?  
?」

少しだけ嗚咽を交えながら、唯一の心配要素を私は口にした

カルマと引き換えにしてしまつ、その大きすぎる代価だ

「ライブには絶対行くのですーっ」

真つ先に有珠がにやふーっと飛び上がりそんな不安を打ち消した

「ふふつ、もう私達恒例の付き物ですね、ゆりちゃん、タイムリミットですよ、」

「……え」

「やつれー、三日間で世界を変えてやるんだ!」

澄んだ空の下、灯が胸を焦がすほど熱く声を轟かせた

「ハルはあたしらの友達つてわけじゃない、けど親友の大切な友達だ、だつたら全員で助けるしかないじゃんか」

「ライブには本当にやりきつた後で行きたいのです、中途半端な気持ちちは嫌なのです」

「ゆりちゃんのいないライブに興味なんてないですからね」

「…ボクも…力になれるなら」

全員が団結し、真剣にこの街の真実の向こう側に行こうとしていた

「救いに行こうッ まだ時間は二日も残ってる…」  
灯が手を差し出していた

「…あ…あ

言葉にならなかつた

孤独な仲間がもう一度集まり、夢を追おうとしていた

「……」

限りなく絶望的に不利な状況にいることは間違いない  
失敗すればライブには行けず、それどころか今度こそ退学は間違  
ない

それくらいのリスクを背負わないときつと逆らえない戦いだ…

自殺行為だ、普通ならこには大人しくやり過ごすのが当たり前だ  
だけどね

(…そうだ )

私達は、私達こそが

(… selling dayなんだ、 )

その名の通り、私達を売り込む出航の朝だ！

ここで一步踏み出せば、目の前には劇的な変化が、紙一重の凄絶な  
戦いがきつと待っている

本当に叶えてしまえる、カルマの法則さえ覆してしまえる

そんな夢みたいな大逆転がこの五人とならしつかりイメージ出来てしまふ

(……)

だから私は、もう一度ボーダーラインを越える決意をした

「私も、全てをかけるよ」

胸を張つて、星もない静かな夜に、最後のチャンスをカルマへと踏み出した

日常を捨て、街中がまた敵にまわった

けどやつぱり、私達の分岐点は、進む道はこうでなくちやだめだけ倒的不利な状況やリスクな時間の中でも、何度も諦めずにカルマと対峙してきた、そして消化してきた

それが私達の青春だ

「じゃあ早速、作戦を考えにこれから口だまり喫茶店に、お泊まりに行くぞ!」

そして再び、弱者達は気高き執念を持ち、戦場へ再臨する

負けない為に、後悔しない為に、力と危険を共有し

たつた一つの終わりを迎えるため、三日間で世界を変えるため、落ちこぼれは立ち上がる



女子高生になつて初めての夏

皆で始めた一ヶ月最後の週末、ついに私達はここまできた

最後の最後、最終戦突入だ

現状を打破して打つて出た再始動のスタートは

女の子だけの、お泊まり会、という、華々しい意味とはまるで正反対の大作戦会議の夜更かしで始まった

残された三日間を最大限に使うため、この勢いを途切れさせることなく今から日だまり喫茶店に泊まり込むことになつた

なんだか私はそれだけでドキドキして、門出の酔い心地に歓喜していた

現実とはかけ離れた一世一代の大チャンス、久しぶりの完全アウェイの感覚が飛び跳ねたくほど無性に嬉しかったんだ

終わるまでは帰らない、警察にも邪魔されない方法で  
私達はもう一度絶望と手を繋いで動き出した

.....

皆を家の前で待たせたまま、私は慌てて身支度を始めた

駆け足で部屋に戻り、何口かぶりに新しいブラウスに腕を通して制服に着替え、ぐしゃぐしゃだつた髪をポニー テールに結わえる

ブラウス一枚だけじゃ少しだけ肌寒かつたけれど、なんでだらう、なぜかベストもカーディガンも羽織りたくなかつた

床に置いた学生カバンの中に二口分のブラウスや下着の替えをぎゅうぎゅうに入れる

顔を上げて見た編み戸の外はすっかり晴れ渡り、待ち遠しいほどに私の胸を高鳴らせた

生徒証に、薄いお財布にあるだけのお金を詰め込んだ、他にもCDや色々と使いそうな物をしまいこんでいく

余ったスペースには歯ブラシや充電器、また月曜日から始まる学校に必要な最低限の筆記用具をしました

もつこれだけで旅支度のカバンはパンパンだった

重い学生カバンを背負い、携帯をポケットに入れて、編み戸のまま部屋を出た

最後に、リビングでイスに座つてテレビを見ていたおにいに一言だけ別れを告げた

これから大変な迷惑が被る事も重重承知の上で、おにいは何も言わず、紅茶をすすりながら小さく手を振つてみせた

(……)

きっとやり遂げる決意を無言で交わし、私は全ての平凡を手放して、  
その場を去った

小走りで玄関に向かい、使い古したローファーを履いて、私は助走  
をつけて夜に身を投じた

そして、右足はゆっくつと仲間のいるスタートラインへ踏み出  
した

「……」「

世界は広がり、疲れぬ夜の旅が始まった

（ねえ、ハル、私ね……）

こんな境遇にあっても、こんな逆境のど真ん中でも  
私は一瞬でも自分が運が悪いなんて思ったことはないよ、ないから  
こんな状況でも……、こんな状況でも……

必ず、立ち向かってみせるよ

どんなに弱くても、諦めない、って、それをこんな風に思えた自分  
はきっと不幸なんかじゃないって

学校中にだつて叫べるよ

（ねえ、ハル、貴方はどうかな……？）

私は貴方に言いたい言葉がたくさんある

周りの奴らに勝手に運の悪い悲劇の主人公だなんて思わせたくない  
だからこそ、このまま傷だらけの貴方を見捨てて終わらせたりなんか絶対にしない

……タイムリミット？、成功率コンマ以下？、カルマの法則？

いつたいそれがなんだってんだッ

変えてやるぞ、ここは私達の街なんだ ツ！

主役は誰でもない、私達なんだ

約束だつていい、どんな手段を使ってでも、最後には貴方のカルマ  
を消化してみせるから ！

＊＊＊

始まりのページを彩るような、真夜中の静けさが漂う並木道を進む  
雨上がりの開放感と清々しさをたっぷり含んだ外気は、胸一杯に吸  
い込むと生き返ったように若々しかった

街灯だけの光がポツリと殺風景な道路を照らし、まばらな車が街を  
抜け出した女子高生五人の横を通過していく

僅かに流れる虫の鳴き声は涼しく、風に揺れる青い草の匂いが興奮

を上乗せした

奏以外パンパンのかばんを肩にかけ

今にも見せつけてやるんだと、私達はそんな夢心地でいつもの道を歩幅を大きくして進んでいった

.....

「威勢よく出たけど、さてこれからどうするかなー」

「いろいろは坂に入った辺り、隣を歩いていた灯がふと呟いた  
徐々に景色は高く遠くなり、私達以外には誰もいない、だだっ広い  
夏色の坂道を白線も無視して自慢気に真ん中を歩いていく

「そういえば、今更ながらに思えば灯の腕の包帯も、ギターの弦で切  
つた有珠の指先も、無茶をしたひよりの指の怪我もすっかり治つて  
いた

「作戦全く考えてないの？」

「正直まーつたぐの白紙だ、てかどうすれば勝てるのかも全然想像  
できないさよ」

「灯がうーんと両手を頭の後ろに組んでお手上げとばかりに言った

「ですが現実問題、あと三日間で私達は何かしらの策を練らなければいけないわけですからね」

「にやんにやんおー、きっと大丈夫なのです、喫茶店に行けば必ず

何か思いつくるのですーー」

不意に出た久しぶりのこやんこやんおこ  
思わず三人とも本題を忘れて、空のスクリーンに自然に安堵の笑み  
をこぼした

さつと大丈夫、その一言を聞くと

たとえアマリリスがなくとも、ウイザードが使えなくとも、スイミー  
ーがダメでも

不思議と本当になんとかなりさつな気がしていた

前を歩く奏の後ろ姿は真っ黒だった  
真っ黒で、慣れないさうもない動きでちゃんと四人と回りペースを  
重ねて歩いていた

「さうだね…、さうだよね

「明日を乱したくなる、余白いっぱいの坂を歩きながら、そんな気  
持ちで私はたまらず身体がうずこいた

見上げた空は見たことがないくらい澄んで果てしなく広くて  
左手の雑木林にはまだカブトムシがいそがつた

そしてよひやく、私達は新たな活動拠点に到着した

恐らく二日間私が生活することになる、小さな町外れの喫茶店

「日だまり喫茶店」

\*\*\*

橙色の光がないとただの小さな廃墟のよつだ

ザツザツと足音を鳴らしながら五人は裏手に回った

森の匂いの中、カチャーンと鍵が開く音が辺りに響き、奏を先頭に入つていく

「うつわ めっちゃ籠つてんな」

何も見えない中で灯が声を発した

その言葉通り、中は全く換気がされていないのか、十日分の淀みきつた空気で充満していた

ずっといたら頭が痛くなりそうな、まるで体育館の倉庫のような臭いだった

しばらくして奏が小さな店内の照明を点けた

すぐに温かみのあるオレンジ色が店内を包み込んだ

「……何もないけど…夜ご飯 準備してくるから…」

片言でそう言い残し、奏は奥のキッチンに入つていった

その瞬間、旅先の宿舎につけたときのように、いつものテーブル席に重い荷物を皆揃つて下ろした

「はあ～ 重かつたあ」

灯が遠慮なくイスにビツ。ぶり座る

それぞれカバンを開いてお泊まりの準備を始めた

「アヤソ開いた灯のカバンの中から取り出された物は

「……」

CD、CD、次はと思ふや、またまたCD  
おや?、出でくる出でくるCD

ん?、今度こそは…! と、もちろんCD

「……ねえ灯」

「んー?」

鼻歌交じりにがしゃがしゃ鳴らす手を止めることなく灯は返信した  
その間にもテーブルの上にはCDが積み上げてらわれていく

「これは少々おかしくない?」

「ビニがー? 非常に一般的なお泊まりわよー まあ、場所は特殊  
だけどな」

がしゃがしゃ、がさがさ

(……)

「いやいや、お泊まりとこより今貴女の出でてこる荷物があり  
得ないほど一般的じやないんですが!?」

「おー! 久じぶりのゆつのシッ ハリだつ たまらん!」

(……えー)

自由すぎる灯の圧倒的空氣に瞬きを忘れる

「まあアレさよ、灯さんから音楽を奪つたらパワー半減だから大事なんさよ キリッ」

最後とばかりに、萎んだリュックの中から「コンポが我が物顔で登場し、テーブルの上を占領した  
灯は相変わらずくつしゃり笑つてみせた

「「いや～」やん～おー」

半ば呆れて前の有珠の方に視線を移すと

( ツ！？ )

「ちよ、ちよつと 待つて有珠」

思わず瞳の先の不意討ちに反射的に声を出しちしました

「「いや～？」 どうしたですか？ ゆりも一つ食べたいですか？」

「

「いや大丈夫… つてそこじゃなくて」

視界の先には、パンパンに膨らんだカバンの中から出でてくる

お菓子、お菓子、お菓子

駄菓子とお菓子の山！

更にはフィーチャーとばかりにロールケーキや和菓子やプリンまで  
出てくる始末

たちまち山の前にお菓子の山がそそり立つ

「お泊まり会といつわけですし 有珠急いで買つてきたのですつ  
えへへー」

そして天使のような愛くるしい笑顔を見せる有珠  
きつと本当に楽しみだつたに違ひない

(……)

なんだかとてもじゃないけど有珠のあどけない笑みを泣き顔に傷つ  
けるツッコミは出来そうになかった

「はあ……もう

変に疲れた後、この人は大丈夫だらうと一番のしつかり者に目を向  
ける

「ふふつ お二人とも個性的でいいですね」

包容力のある微笑みを浮かべながら、随分スペースを持つてかれた  
テーブルの上にひよりの荷物が広げられる

田用品が出て、次にノートや筆記具、カバンの大部分をしめるノー  
トパソコンを取り出した

(よかつたあ…ひよりはやつぱり普通だ )

まったく、それに引き換えこの二人は、本当に戦う氣があるので  
うか

「ふふつ ゆりちゃん、『めんなさい』

「え??」

と思いきや、カウンターの如くひよりはいつそり照れたようにカバ

ンから数冊の本をちりりと取り出した

ピンク色で覆われた表紙に女の子が一人抱き合っているハーベ

やたらとシンシンの髪の毛の青年がもう一人、女の子のよつたな顔立ちの男子を捕まえるように背から手を回している漫画

「……」

「まあーな、ひょりも女の子だからな」

「仕方ないのですつ……モグモグ」

「ふふつ、少し照れでします」

「ちよおおつと待つた!!」

「ぬー、なんをよむり クレーマーか? 灯様そういうの好きじゃない」

「違うよ、てか色々とシッコリきれいなよ! もうただのカオス空間だよ!」

「ゆりちゃん大丈夫です、一応全年齢対象です」

「そこじゃないよ! というか私は読まないよ」

ひよりに関してはおひよくに私の反応を楽しんでいた

「ゆりちゃんすみません、でも毎日眠る前に読んでるので癖になつてしまつてしているんですよ 作戦には支障は与えませんから」

くすくす笑いながら、ひよりは口元をカーティガントリヒと

出した指先で押さえていた

「…まったく、もう」

テーブルの上にはこれから街と戦う人間の物とは思えない品が散乱している

困り果てて、私はツッコミを諦めた

（でも、なんだかこういつ会話も久しぶりだな）

気がつくと、目の前の三人の光景に、思わず私も釣られて一緒に素顔になつて笑つていた

それはいつかの、部室のお昼休みに似てた光景だった

＊＊＊

奏お手製のオムライスを皆で一つだけのテーブルで囲んで食べた

お肉がたっぷり入つていて、半熟のところには喫茶店のコックさん・奏の腕の実力をを見せつけた  
力チャリと手元で鳴つた綺麗な銀色のスプーンが更に食欲をそそつて、恥じらいも飾り気なく子どものように私は口に頬張つた

感想はもちろん、口の中いっぱい美味しかった

なんだか喫茶店の夜にこいつ風に食べていると、お泊まりというより、仕事前のまかない料理を食べているよつて不思議な気持ちになつた

奏も一緒に座つて、一緒に食べながら賑やかに話に交ざつた

一番最後に有珠が「ちそつさまを言い

そして、私達はついに作戦を開始した

歯を磨くことも忘れて、時計の音も見失つて、食器を片付けた後に、  
とびっきりの夢を目指して突き抜けた

籠つていた空氣を入れ替える為に、蚊が入るとかそんな小さな事は  
何一つ構わずに

あちこちの窓を大げさに音まで鳴らして得意げに全開にしていった

洗い立ての真っ白いシーツがあつたら干したいくらいの、新鮮な空  
気を青い夜風に乗せて総入れ換えた

気分も幾分か晴れやかになり、月明かりが差し込んだ店内の中心で、  
五人はテーブルを囲んで  
長袖の袖口を捲り上げて、作戦を開始した

みづやく、ここからが出発点だ

クジラだって飛んでそうな希望に満ちた月夜の下  
騒ぎ出した胸は熱を増して、逆らう意欲を膨らませて私達は勝負の  
夜を企てた

開け放たれた窓からは、まさに出航の朝にふさわしいマイナスイオ  
ンたっぷりの風が吹き込み、狭い部屋を最大限に広く使っている

更にはどっから持ってきたのか、テーブルの上には体育祭や行事で  
しか使われないよつた、巨大な真っ白の用紙が広げられている

それはまるで、部室の据えられた机と作戦が書かれていた黒板のよ  
うだった

「さて、どうするか

灯を筆頭に、黒ペン片手に考え出された策を協議していく

現在の街の状況から整理した私達の課題は

私達が警察に見つからず、当田、桐島さんのいる警察署までの道の  
りを搅乱し

そして警察より先にハルを見つけ、桐島さんを殺さないように説得  
し、導くこと

その後はどうなるかは分からぬ

けれども恐らくこれが真実を知った私達が、このカルマに介入する一番道徳的方法

- ・ハルを見つけ、ウイッヂから救い、殺意を取り除く事

あのハンバーグでもだめだつたんだ、とても口で説得出来るとは思えない

ハルはそれほどの傷を抱えている

だから、この二日間でこれに關してもあらゆる策を練る

- ・警察を阻止する事
- ・桐島さんに会わせる事

二人が対面したらどうなるかも分からない

今更ハッピーエンドは求めないし出来そうもない、結局どちらかが潰れて終わるリスクはある

だけどきっと両者の言い分を交えるには、やっぱり顔を見て、声を出して話さないといけないと違うから

それが、一度はカルマによつてバラバラに引き裂かれた私達の経験から導き出された

真実の向こう側へ行く答えた

\*\*\*

とは言つたものの、勢いだけは一端に、確かに現実的に考えるとなかなか案が出てこない

ウェイザードの広範囲のフュイクも、誰もを欺くスイミーのサムも、そして重量ゼロのアマリリスの攻撃力も

今はもうない、全てが見つかってしまったのだ

つまり今、ここにはただの女子高生が五人いるだけ  
ただの弱い、無力で普通の女子高生がいるだけ

それでどうやつたら勝てる？

三日間で、どうやって一度敗れた街を倒してみせる？

どうをどうすればいいのか、全く想像も出来なかつた

「…………」

さすがの灯も今回ばかりは手の動きが止まつていた

「どうしましようか

そのまま数分、ほとんど空白の用紙を囲み  
立つては中腰になり、また行き詰まり座つてをメンバーは繰り返していった

「ほにやあ

誰しもが、やつぱり無理なのかと、薄々でも頭の片隅で思いかけていた

無駄に広い白紙が嫌なほどまじまじと気持ちを比例して

なす術がなく、力をなくした私達では無理なのかと  
協議の時間を重ねるほど、偉大すぎる夢の逃げ口を塞がれるようにな

地に足をついた現実に、直面した沈黙の世界に痛感させられていた

ついに、灯の手から一度ペンが置かれようとした

そのときだった

「ボクの、友達の輪、…使つ?」

突如として、現状を劇的に破る、満天の部屋に響いた声

「…え?」

なんとそれを放つたのは、終始無言を貫いていた、あの奏だった

それまで重かつた部屋の空気を青い爽快感がガラリと変え  
目を疑うほどの凜々しい眼差しをジト目少女は向けていた

「え…友達の輪って? 奏の友達?」

「……こくつ

奏は青白い肌を向けて一度だけ頷いた

「失礼をけど、あんまり奏にそんな友達がいそうな気がしないんさ  
けど」

「お気持ちはありがたいのですが、残念ですが、あと一人や一人同年代の友人が増えたくらいでは何も変わらない気がします」

「いやう、というより、この秘密を今更誰かには話せないです」

囲んだテーブルで、冷静すぎる言葉が飛び交った

「…………」

脇に立っていた奏はそれから言葉は発することなく

変わりに

悩む四人に向けて、携帯電話の画面を見せつけるよつこ、反発するように突き出し

「…………みどり団…………」

これでもかと小さな声を張り上げて、そう状況を打破する切り札を差し出した

「…………？？？」

意図が掴めないその強い発言に四人は戸惑いながらも

何かを感じ、とてつもない勢いに光る画面に釘付けになつた

沸沸と胸がざわめいた

（…ドクンッ）

なんだらう、これだ、この感じ

何かが、変わる予兆 ツ

どこかのサイトだらうか  
画面にはホームページが開かれ、そこには三つ葉マークのマークが  
描かれていた

「みじり団つて??」

灯が問いかけ、その瞳には何かを期待してくるようだ

「東京、特に多摩地区を中心に活動する…、高校生だけの、登録制  
SNSマニアティサイト」

「…、やうかッ なるほど、SNSサイトか」

「え？ なに？？」

いきなり灯は身を乗り出し、明らかに先程までとは田の色を変えて  
奏に聞き返した

構わぬ奏は話を続けた

「…ログイン資格は…高校名と年齢、そして血型のコードネームと、  
痛み、をトピックに書き込む事…」

「痛み？ でしようか」

ひよりは分析し、有珠は分からずぽかんとしていた

「……何かしらの問題を抱えた高校生がそれぞれに様々な痛みをト  
ピックに書き、また別の痛みを抱えた高校生がその人のトピックに  
書き込み、助けを協力する……

そして……その書き込んだ人の痛みにも、また恩返しや他の高校生がそのトップに書き込み助ける……そういうシステムのUNIVERSITY君たちと同じ、痛みを共有する、サイト」

（…カルマの法則…）

「面白いな！、いや、めっちゃこいつ」

すっかり干からびていたのはどこへやら、灯は感情を露にして悪巧みの笑みを満面に浮かべていた

少しずつ、私も一人も躍動感に飲み込まれ、徐々に奏の狙いに気がついていく

「そして……このサイトを作ったのは、…何かに自分を残したいと昏睡状態に陥る前に設立した、正真正銘、ボクのお姉ちゃん……だから故に、みどり団、」

「つまり、今は奏ちゃんが管理権限を持つていてことわけですね」

ひよりも冷静に頭を使つて整理していた

「…………」

奏は確信をつくように頭を縦に振った

「で？ 肝心の登録数は？」

灯が溜まつた感情を並々まで膨らませて素早く切り込んだ

それに奏は嬉しそうに、相変わらずミステリアスな表情で「ヤリと

返した

もつわかるだろ?とにかくに、挑戦権とチャンスを授けた

「……今は、262人、だよ、多摩地区で、小さなサイトだからね

」

「そりが、いや、十分すぎるくらい十分だ」

その瞬間、灯の瞳は潤つた

策士は、起死回生の一手を宿して不気味なほど無敵の笑みを浮かべた

「ほにゃあー なんだかワクワクしてきたです」

「もうカルマも能力もカラッポなんでしょう……だったら……せめてお姉ちゃんが残した、この、カルマと能力、使って……」

水面下で、勝利へのピースが揃い始める

灯の行動力と、もういない一人のメンバーのカルマが化学反応を起こし、空白を埋め尽くす

「凄い……なんか、本当に不可能じゃないかも、叶えられるかも」

真夜中に手のひらには汗を滲ませて、夏休みを彷彿させるワクワク感が部屋に充満していた

「そりが、これを軸にすれば三日間でも十分作戦は考えられるのさ」

「あとはどう駆使して、どうか使うかですね」

「まさに大作戦なのです」

希望の切り口を田の当たりにして私達は浮かれていた

そのときだつた

「……でも使うなら、一つだけ条件が……」

奏が最後にボソッと言つた

「? 条件?」

「あうー?」

チヨコバットを口に突っ込んだ間抜けな顔で有珠も首を傾げた

「…………」

口ごもり、一定の間を置いた後

空氣の温度差を変えて

勇気を振り絞るように奏は思いきつて言つた

「ボ……ボクを、このチームに入れてほしい……」

顔を俯かせて、いけない事をした後のような消え入るような細い声で、その胸の内をさらけ出した

言い終わった後に、奏は少しだけ自信無さげに口を閉じた

## その瞬間

「は？？」

「奏ちゃん？ 何を言つてゐるんですか？」

思わず、私も一人と同じ気持ちを抱いてしまった

「…………そり…………だよな、ボクなんて」

引き籠もりだつた夜の住人は、打ちのめされたよつて表情を冷たく  
曇らせた

（…………奏も馬鹿だな ）

だつて、なぜなら

「言われなくたつてもお前はとっくに *seeling day* と  
痛みを共有したメンバーだろ？」

「ふふふ あらたまつて何を今更ですね」

「やうなのですから、奏はとっくに仲間なのです お菓子もあげちゃ  
うです」

（十日も前より仲間なのに、私達 ）

「…………！」

ジト目を見開いて、目の前の仲間を見ていた

奏らしくもない震えに、それは驚いたよつて、それは思い返すよつて

立ち尽くし、瞳はバツと濡れていた

「なんだ… そ…うか… つ…」

目の前の幸せを、泣き笑い、誤魔化さずに嗚咽を交えて噛み締めていた

「ボクは… もう… ッ」

「遅せえんさよ気がつくのが、当たり前だろう」

両頬から白い零を落とす新メンバーを見て、灯はケラケラ親しげに笑つた

ひよりは微笑みを絶やさず、有珠は心からの満面の笑みを浮かべて寄り添つた

「そうだよ、私達は仲間だ、この五人が、私達が selling dayだつ」

私は、少しだけ感動していた

「……ぐすつ…」

奏は、滴り落ちる涙を隠さなかつた

それは、まるで一昔前の私を見てくるようだつた

……

私達は相変わらず何もかも欠けていて

相変わらず、防御を張る前に不意に来た手作りの優しさにほほ成す術もなくて

免疫もなくぽろぽろと涙を浮かべたりしてしまつ

それが、体温をなくした私や、レズビアンなんかの灯や、接触障害のひよりや、見た目の差別に苦しんだ有珠やなんかで

友達もいなかつた、希望もなかつた、痛みしかなかつた同類で

だからよくわかるんだ、その涙が出てくる理由が

とってもよくわかるんだ

そんな、ばか正直に泣くほどどの幸せに出会えた訳が

.....

それをもう経験した四人は茶化すこともなく  
ただただそつと呼吸を合わせて、新しい仲間の前で

月夜の光が差し込む橙色の中で、  
ゆっくりと懐かしい瞬きをしていた

誰もが眠る壊れた世界の隅で、まるで嵐が来る前の楽しげな真夜中に懲りずに、腹ペコの余白に夢中になつて私達は試行錯誤の策を書き足した

お馴染み、街に迷惑をかける、危険だらけの策です

開けつ放しの大きな窓からは涼しい夜風が部屋をなびかせ染め上げている

カウンターの奥、昨日新しく買い替えたらしい奏の新品のノートパソコンを前に  
五人は秘密基地のような狭いスペースの中でぎゅうぎゅうに身を乗  
り出して画面のサイトに食らいついた

割り当てられた役割もない、まだ原石の新たな戦略を日の当たりに  
する

私達のカルマは消化され、能力も失つた  
だから利用する事になつたんだ

一度きりの最後の賭け

残されたあらがう術

新たな新メンバーの能力、みどり団、を

「トピックの掲示板の他にメール機能まであるのか、プライベートメッセージ、URL、画像の添付も可能」これは予想以上に使えるさよ 奏「

奏がイスに座り、すぐ横に灯が顔を据えてマウスをいじり、「マイページサイトを隅々までチェックする

そこには新着順のトピックが広がり、救済の手が差し伸べられるのを待っていた

・訳あって親に嘘をついてバイトをやめ、携帯代が払えない者

・隠れオタクで、親友にカミングアウトしたく、背中を押してもらいたい者

・友達がいじめられ、どうしても助けてあげたい、けれど一人で立ち向かう勇気がない者

・今年の文化祭でライブをしたい者

更には

・今日の帰り、本気で駅から飛び降りようとした、情緒不安定に自殺を志願する者

・昨日、出来心で他人から財布を盗んでしまった者

など、退学の危機にあるものや、はたまたゴキブリが出たなど他愛もない事まで

大小様々な、けれども本人には今もリアルタイムで真剣に悩んでいる問題ばかりだった

助けてほしい、こんな自分を変えたい、方法を教えてほしい

そしてそれに同じ境遇の高校生達がネット内で何百と提案し、手助けをしていた

大人になればきっと忘れてしまつ怪物相手に、必死に戦っていたのだった

「ひより 少し聞きたいんだけど」

ずっと画面を眺めていた灯が腰を上げて問う

「はい？ なんでしょうか？」

「もしこのサイトに管理者からの緊急トピックを書いて、全ての登録者に9月1日に召集出来ないかメールを送つたら 警察とか桐島側には見つからないかな？」

「どうでしょう、やり方次第だとは思いますが、特に大きく有名なサイトという訳ではありませんし  
具体的な作戦内容等はギリギリまで送らず、こつそりと慎重に行え  
ば三日間なら平氣だと思います

部外者には見られないようフェイクの方法はいくらでもありますから

後はそうですね、登録者の誰かが情報を漏らしたりしなければ大丈夫だと思います」

「つまり簡単には、一致団結させるトピック内容があつて、なおかつ内幕で進めればいいって事だよな？」

「簡単に言つてしまえばそうですね、仮にも設立者であり管理者からの緊急トピックとなればノリや便乗であれ協力者はいると思います」

「…凄い…こんなものがこの街の高校生に」

「なんだか鳥肌が立つてしまつのです！ 262人の援軍さんなのですね」

有珠は期待に胸を弾ませて後ろで背伸びをしてぴょんぴょん跳ねていた

「となると、人数は多いほどいいな」

考え込むように口元に手をあてるポーズをとつて灯は企んだ

そして、すぐに次の行動に轉じた

「ゆり、ひより、有珠、奏、ぜひ聞きたいことがあるんですけど？」

「…？」

あらたまつて、灯は意味ありげに問いかけた

私は期待に胸が踊つていた

「皆とネット内だけで繋がる、近場の高校生のネット仲間はいないか？」

(高校生のネット仲間？？)

相変わらず、また灯は突発的に意味の分からないことを話した

「例えば、あたしだつたらミューの多摩ハイコがある」

ぽかんとする四人を前に、恐らくフイナーレの計画が形成されつつあるリーダーは先陣を切った

あつと、もう灯の頭の中にはシナリオのヒントがあるんだ

「こやひ、よくは分からないですが、なるほどです だつたら有珠もありますよー

よくお世話になっているサイトさんなのですが、チャットがあるです 高校生も多いのです  
……実をいうとネカマなんですけどね ……こやはは

「……ひより？ ネカマつて？」

笑う有珠を横目に、見つからないように小声で隣のひよりに聞いてみた

「男性がネット上であたかも女性のように演じ偽る事、この場合は逆パターンですね」

(…そつか…有珠)

きつと、悪ふざけとか相手の気持ちを弄ぶ為なんかじゃない  
それはそれはかっこいい、小さくていじめられたりもしない

銀髪で目も青くない、身体には足跡も痣もない

素性の分からないネットでだけ、せめてもの空想男子を演じていた

んだらうな

「やつですねえ、灯ちやんのこつネット仲間とこつて私が該当するのは ブログの百合『//コニティ』くらこでしょうか 結構人数も多いです」

「ボクは……オンラインゲームのギルドになら、多分当てはまる人……いる」

「せういえば、前に言つてたもんね」

「…む…」

少しだけ私が馴れ馴れしく話しかけると、イスに座つていた奏は不機嫌そうにパツツンの前髪をジト目にかけて瞳を細めた

「う、ごめん…」

「そういづゆり君はないんやー？」

指揮官の声が届く

「私？？ うーん私は…」

何かあつただろうか、有珠やひよりのよつにチャットもブログもやつていなーし

そして考え込んだ末

「あ…」「アレなーじと、とつやに思つてく

「何か思いつきましたか？」

「もう全然やつてないけど一応、ツイッターは心当たりあるかも」

昔、なんとか友達が出来ないか、一人寂しく探していた悲しい時期の產物だった

「それだけあれば、最低でも200人は集まるだろ? な、いけるな

」

灯は、ぶつぶつ何かを言つた後、バッと反転してひらめいたように四人に今夜すべき事を言つてのけた

「、」の街に潜む同類全てを巻き込んでほしい!」

これからしてほしい事

といつのも、携帯とパソコンから

mixi、チャット、ブログ、ギルド、ツイッター

ネット仲間の知り合いに当日、集まる人がいないか総出で探す事そして、みどり団に設立者からの緊急トピックをトップ画面に作成し、全ユーザーにメールを一斉送信すること

更にひよりは、関係のないみどり団に万が一サイトが規制されて危害を与えてしまわないよう  
念には念を、ダミーのサイトや避難場所を作る事

常識はずれの衝動に身を任せ、小さな喫茶店を発信源に最終戦を前に、たった五人の少女達は街中の高校生、同じ境遇の敗者をかき集めた

弱者は、本当にもう一度真っ向から街に対抗するのだ

ひっくり返してみせる

.....

一般論で、常識的に冷静に考えれば

…どうせ二回なんかじゃ何も変わらないと、そつ黙りでしょ？

圧倒的逆境に、こんなゴミみたいな最下位の五人なんかでさつてたかが一つ残された小さなサイトと無力の高校生なんかが数集めなんかして、街を支配する大人に勝てるかよってさ

でもね、不可能なんかじゃないんだ

ここにいるとね、なんとかな  
この五人ならきっと出来る、また奇跡をやってのけてしまえる

一点の曇りなく、笑い声をあげて息も荒くして本当にそつ黙えてし

まるるんだよ

見てるがいい、これからカルマの法則を破る、私達の歴史的反撃の二日間を

＊＊＊

部屋一面、空も夜風も甘酸っぱく染め上げて

終わりかけの夜、丘の上ではまだ名もなき最後の作戦の下準備が行われていた

夜通しで作業を続ける部屋の中、灯が持ってきたミニコンポから、BUMP OF CHICKENのアルバム曲がライブ並みの大音量で響いていた

濃紺色の野外にまで大声で歌つように突き抜けて

調子外れの灯の作業用BGMは、屋根をなくしたように解放感と興奮で周囲を浸した

力チカチカチッ

そんな穏やかな中で、悪巧みは産声あげて、指は驚くほどスラスラと文字盤の上を走つていった

小さな店内、灯だけは立つたまま書き足された白い用紙を広げて、靴下を脱いだ素足でローファーを履き潰して作戦を考えていた

有珠は私の前、テーブル席の窓側に座り、小さな手に携帯を持ち、両手を使って真剣にチャットをしていた

口にくわえたポツキーはかれこれ何分だらうかくわえている事も忘れたよう、すっかりチョコの部分が溶けてなくなっていた

そんな有珠の横に座り、一番の大仕事を任せられたひよりは自前のノートパソコンから協力者を探し

カウンター奥の奏がみどり団にコーディー限定観覧可能なトピックを書き込み、アップすると同時に

全アカウントに緊急メールを一斉送信していた

そして、私達五人全てのネット仲間からの返信も、ひよりのパソコンに全て送られるようにした

カーディガンの手元に置かれていたアイスコーヒーは表面上に水滴を溜め、時折傾いた氷の音が涼しげに響いていた

灯のmixiページ、有珠のチャット、私のツイッター、奏のネットゲギルド

そしてひよりのブログコミ

一晩経てば、一つのYahoメールのアドレスに集結するよう、それぞれに張りつけた

みどり団はひよりの携帯のフリーアドレスとパソコンのアドレス

もしくはみどり団の管理者アドレスに届くよつて、トピック・メー  
ル それぞれ書き込んだ

サイト自体の保護も終了し、後は明日の朝

SOS信号から何かを感じてくれたこの街の傷持ち高校生達262  
人からの返事次第だ

頼むよ、届けよ、共有してくれ

これが最後の策なんだ

.....

\* \* \*

作業を終え、私達は喫茶店の電気を消した

広げていた作戦用紙は丸めて脇に立て、ひよりはノートパソコンを  
閉じた

歯磨きをして、トイレも済ませて、少しだけべつたりの髪は不思議  
と気にはならなかつた

全員が横になれるスペースはとてもなく、元より布団もなく、私  
達はそのままイスで座つて眠つた

灯は無防備に足を広げて、頭を天井にあげて、まるでぐがーといびきを出すように口を開けて眠っていた

ひよりは丸まつて、羽織っていたブカブカのカーディガンをすっぽり首までかけていた

鼻先から上をちょこんと出して、大人しくすやすやと眠っていた

有珠はテーブルの上に組んだ両手を枕にして、まるで授業中の居眠りのようだ、小動物のよつな愛くるしい寝顔を浮かべていた

たまに、うにゅにゅにゅにゅんにゅんと寝言を発しながら顔の向きを変える姿に自然と笑みがこぼれた

そしてそんな私は、一人すっかり目が冴えてしまっていた

音のない夜は驚くほど静かで

イスに背を当てて、月明かりが差し込む窓から月や夜空をぼーっと見上げていた

新しい旅立ちの余韻に胸がまだ高鳴っていて、眠気はすっかり飛んでしまっていたのだ

「……」

少しそのまま目を閉じたり、自分の呼吸を気にしてみたり充電中の携帯を触つてみたり

あまりにも寝つけず、私は気分転換に腰を上げた

スカートをひらりとなびかせ、灯を起こさないように跨いで喫茶店

の重い扉を開けた

外に出ると、辺りに茂る木々は海の底のよつよつと深い眠りにつき

葉だけが冷たい風が通るたびにゅうりゅうと音を立てて揺れていた

そんなどつぶり浸かつた夜のふもとこじつと立ち、一人類の酔いを  
冷ますようにたそがれた

「スー・ツ ハー・・ツ」

澄んだ外気を吸つて、始まつた感覚に物思いに更けた

（本当に、また始めたんだね ）

（… もつと間に合つよね、今度こそ勝てるよね ）

自分で出した問いかけのくせに、はつきりとした答えがわからず  
いつの間にか、見上げていた首は下を向き、少しだけ現実味を帯び  
た瞳の先で足先は土をいじつていた

ザツザツ

そのときだつた、音のなかつた世界で耳元に土を踏む音が流れた

「眠れないのか？」

新しい寝癖をたくわえた、灯だつた

「……うん、なんかついにって思つと田が冴えぢやつて」

一人の間に優しい時間が流れた

これといつて何もなく、そのまま喫茶店の前で話した

灯は立つたまま壁にもたれかかって、私はしゃがみこんで他の誰も起こさないよう、ゆつたりと浮かぶ雲の下で小さく小声で話した

「灯？ 聞いていい？」

「ん？」

視線は合わせず、横に立つ灯に何気なく聞いた

「あの……せ、本当にまた巻き込んで良かつたのかな……？」

思わず本音が漏れる

(……)

絶対無理だと思っていた

花火大会の日のよつに、全員が精一杯に走り回つて夢を掴もうとした日々はもうつて

けれど、また皆とこうして集まれた、こうして新たなチャレンジの門出に立つ事が出来た

夢中になつて全員で作戦を考えたり、くだらないアイディアを出し

あつたり

一緒に「」飯を食べながら笑つたり

ひよりの読んでいた本の栄を勝手にいじつたり、灯にポーテを後ろから掘まれたり

それは何にも増して嬉しくて、がむしゃらに樂しくて

夏の匂いも感じれたり、今も充実感でいっぱい

でもだから……

ふと一人で落ち着くと、その隙間から現実的にビツと、もし、が湧いて押し寄せてきてしまう

「……私はね……正直また負けることが怖い」

身体を丸めて、高一らしい胸の内を明かした

そして、灯はそれにいつもの口調とは変わつて答えた

「この選択が正しかったのかなんて誰にも分からぬ、もしかしたら勝ち目はないかもしない あたし達はただ自分達の首を絞めているだけかもしねい」

「…………」

「でもさ、だとしても、たとえこれが過ちだったとしても、あたしはこの道を眞で進みたいし、間違いだなんて一欠片も思つてない」

「……うん」

「上手く言えないけど、君と一緒に信じた道を、この君とこれでもかつてくらい 最後の最後まで夢を手指してあがきたい」

「うん……」

そして、灯はしゃがむ私の頭をぐりぐりと撫でた

安心をせるように地肌に熱を伝えてくれていた

良かつた、話せて良かつた

答えとかじやなくて、気がつくと、胸の隙間はすっかりなくなつて  
いた

「……でも、同じだよ、あたしだって、やっぱり怖い」

「……そつか」

ちょっとだけ、意外だつた

そして、何だか、無性に嬉しくて安心した

「けどや、そんなアンチがつくほどの壮大な夢を、あたしらは持つてんだよ？ それってさ、結構スゲー事なんだよ」

「敵ばかりだけどね」

「明日には味方もうんと増えてるけどな」

不安なんて笑い飛ばせてしまえる笑顔をお互い向けて、私達は眠らない夜を跨いだ

「それでもゆりがまだ心配するなら、あたしが勝算なんかいぐらでも作つてやる」

「……ううん、もう大丈夫、ありがとう灯」

「そつか、じゃあ寝ようか？ 明日からまた忙しくなるわよ」

「うん」

一人は幾分か晴れ晴れと、扉をそつと開けてテーブル席に戻った

「ねえ、灯？」

「なんさ？」

（……）

「なんでもない」

「おひ……」

もぞもぞと座り心地をお尻で確かめながら、眠る一人の前で、こつそりとお互いの気持ちを声以外の仕草で伝えあつた

（また救いに来てくれて、皆を集めてくれて、本当にありがとう）

灯は耳にヘッドホンを被せて眠つた

また、後ろ髪はねじっていた

そして、私も長かった一日を終えた

足を投げ出して、心地よい意識を明日へと手放した

・9月28日・(日)・1日目

眠った記憶もなく、いつも通りの新しい朝が世界に訪れた  
差し込む白い光に目覚めると、透き通った空氣と緩やかな木々のざ  
わめきが耳元で流れていた

まどろむ意識でボーッと遠い瞬きをしていると

「お、やっと起きたわー？」

横に座っていた灯の声が左耳に届いた

「ゆつりゃんおはよ」わこます、もう八時過ぎですよ」

続いたその声に会わせて、寝ぼけ顔で辺りを見回すと、私以外のメ  
ンバーはすでに朝の音を鳴らして動いていた

どうやら私が一番最後まで眠っていたらしい

きつと瞼して気の緩んだ私の寝顔を見ていたんだと思うと、今更な  
がらに目を擦つて前髪を触つて直したりしてしまつ

そして、その目覚めはサンタが来た朝のように

重大な結果発表の事をハッと思い出し、私は眠気を飛ばしてビクリ  
ツと起きた

「みぢり団、みぢり団はつ！？」

いきなり声を出したものだから、ろれつが回らず、なんとも間抜けな表情になってしまった

「やうですね、これはさすがに、予想外ですね、」

「え……？」

……だめだったのか

カチカチとパソコンをいじるひよりの言葉に一瞬の不安がよぎった  
けれどもその瞬間、そんな不安は上書きされた

隣の少女が栗色の寝癖を揺らして、口端をこれ以上にないほじ一ヶ  
口つ上げてピースサインを私に向けていた

「、ぱつちりやよッ、」

反動をつけて、灯は私の想像とは真逆を囁つてのけた

「めつちやスゲーょつ、もう朝からひつきりなしうー ゆりもひよ  
りの携帯とパソコン見てみ？」

その一聲に完全に意識は冴え、そして視線を前に座るひよりに戻すと

携帯の着信ランプが止まる」となく光り、バイブルーションが一向  
に鳴き止む気配を見せずに

歓喜に湧いて机の上で跳ねていた

「「」んなに、メールが 」

席を立ち、ぐるりと回つてひとりのパソコンの画面も覗いてみると  
そこには、続々と目を覚ました街の弱者達から、目まぐるしいスペ  
ードでメールが集結していた

「フォルダの容量がパンクしてしまいそうです 返信が追いつきま  
せん 」

まさに予想外の嬉しい悲鳴だった

その間にも、まるでウイルスにでもまつたよつて、画面上には歯  
止めもなくメールが流れ込み、途切れず加速を続けていた

「本当に凄いね、何人集まるんだろ? 」

まだ朝の八時だというのにこのペースだ  
目の当たりにした光景に思わず胸が弾む

「「」やう? ゆり おはようなのですー 」

「あ、有珠、おはよー 」

見入っていると、奥から有珠と、これまた不機嫌そうな奏が顔を覗  
かせた

「有珠見た? 凄いよつ、もう五十は軽く越えてるよつ 」

「知ってるのです、寝てるゆりを灯がいじつてたときから知ってる

のです 「

「えー? 」

思わず灯の顔を見返すと

無駄にニヤリと満足げな表情をしていた

.....

興奮も覚めやらぬ中、奏が木製のトレイを手にして、いつものように視線は合わせず言った

「.....先に、朝ご飯.....」

持ち手のついたトレイの上には焼き田のついた小麦色の食パンに、マグカップに注がれた紅茶が美味しい香りを漂わせていた

「そうですね、今日はこれから長い作業になりそうですし、ゆりちゃんも起きたことですし、先にご飯にしましょうか 」

そうして、私達はまた昨日の夜のよう、木田の匂いのするテーブルを囲んだ

\*\*\*

別荘にいるときのような肌触りよく湿った爽やかな朝、開け放された窓から青い風を部屋に招き入れる

トースターから食パンが焼けた音が鳴り、オレンジのジャムの香りがほのかにする

人数分のパンが焼き上がり、ゆったりした和の店内に朝食が揃い始める

白い丸皿をテーブルの上に五つ並べ、メイプルシロップにバター、果肉たっぷりのお手製ジャムが置かれる

準備中、私だけはキッチンの流し台に向かい、お水で顔を洗っていた

濡らしたタオルでベタついた首もとや身体の油を拭き取る

それだけで気分は爽快になり、新しい真っ白のブラウスをカバンから取り出して腕に通した

ふと見た一の腕の蚊に刺された跡も、今だけは愛おしく感じた

「奏一？ ローンフレークない？」

向こうでは灯の声と食器の音が響いていた

ポニーテールを解いて、べつたりしていた髪もお湯で蒸らしたタオルで拭いて結い直す

そして、私もテーブル席に戻った

綺麗に並べられた食器の上には美味しそうに焦げ色のつけた太めのパンが置かれていた

全員が準備を済ませ、テーブル席に座り、一緒にいただきますをした

「……はい、ゆり……」  
パンを手に持とつとしたときだつた

奏からショボーンのマグカップが手渡される  
中には柔らかなチョコ色のココアが淹れられていた

「あらがとう」  
一口カップに口をつけると

（…おいしい…）  
生ぬるこ皿さが起きたばかりの身体にすつと染み込んでいった

「有珠はイチゴジャムなのです」

たっぷり塗られたバターの上にサクサクと生地の音を鳴らしてジャムが塗りたくられていく

「では私はメイプルにしますね」

嬉しそうに、ひよりは手元の紅茶に角砂糖を一つそつと落とした

それぞれにはむむと頬張り、何気ない朝のヒトコマはすべだらない会話とともに進んでいった

「有珠ー？ グミ持つてねー？」

「一いちゅうあるですよ？」

なぜかコーンフレークに牛乳を注ぎながら、灯はグミの入った袋を片手に受け取つた

(グリルヘヘ)

そしてまさか、次の瞬間

牛乳と共にそれは躊躇なく中にボトボトと投入された

「灯ー? なにやつての? セサガにて食べ物で遊んじゃダメだよ  
」

「おー? ハーンフレーググリセヨー?」

然も当たり前のようになり、そのままなんの抵抗もなくぱくぱく食べる灯

「つまこれよ?、一口食べー?」

「こ、こや…私は…」

半ば引寄せみに、白い液に浮かぶ色とつぶつとグリ

はつかり言つて罰ゲーム張りに不味そつだつた

(灯つて、もしや味覚音痴??)

冷蔵庫で冷やしていた焼きプリンを食べながら、有珠はぱちくつと  
好奇の眼差しを向けて固まつていた

その脇では、先に食べ終わったひよりが慣れた手つきでお母さんの  
よつて果物ナイフで梨を剥いてくれていた

「 もう本当に夏も終わつですね 」

瑞々しい梨を一口かじると、しみじみと秋の味覚と夏の名残を口の中で感じた

それは少しだけ寂しくもさせて、充実した夏の思い出の延長にまだいる自分を嬉しくもさせた

味の合わないココアを飲み干して、カップの底に溜まっていた甘い部分を舌にゆっくりと溶かして、至福のときを実感した

太陽は昇り始め、窓からは青が強く見えていた

セミの鳴き声もなくした穏やかな陽気、濃くなってきた外の抹茶色の緑を眺めながら

私達は緩やかな朝食を終えた

テーブルの上の食器は全て片付けられ、代わりにパソコンと大きな作戦用紙がスペースを占領していた

カチカチとキーボードを打つ音と BUMP OF CHICKEN のメロディが店内に大らかに響き

ひよりは傍らにコーヒーの入ったコップを相棒に、ヤフーメールに送られてきたメールを一つ一つ丁寧に返信していた

私も携帯から、ひよりから教えてもらったログインパスワードでフォルダを覗いていた

すでにメールの数は百件近くにのぼり

そこには賛否両論、一人一人の言葉が巡っていた

・何をするんですか?、集まる理由を教えて下さい

・ぜひ!! なんかそういうのワクワクしますつ

・このサイトを作ってくれた人からのトピックなら、喜んで力になりますよ

・あなたは本当にリーダーなのでしょうか?、あなたを信じていないのでしょうか?

・なんだかドラマみたいな大規模な事ですね、本当に集まれるのか楽しみです

しかし中止は

・くだらない、てかそれって警察沙汰になるよね？

・本当にやめられない？、リスクとかはないの？

・…すみません、ちょっと怖いので控えさせていただきます、ごめんなさい

・なんか楽観的で無鉄砲な気がする、誰もやつししゃんと考えたほうがいい

など、批判的な書き込みやいたずらに近いメールも少なくなかった  
それはトペックのまつも同じじで、たくさんのユーザーからのコメント  
トが寄せられていた

・リーダーのピンチだ！参加するべきだ！

・「Jは救済コム」ニティだぞ？、俺たちが助けなく死んでしまう

・いや、でもだからって利用していいとは限らないんじゃ？

・やつだよ、こんなよくわからない事に協力して、もし事件が「らみ」に繋がっていて、警察にこのサイトが規制されでもしたらいつもあるの？

・我々はみじり団だぞ！、俺は何であれこのサイトを作ってくれたリーダーに恩がある、だから行く

- ・協力したいです…、でもこのサイトがなくなっちゃうのは悲しいし、本当に嫌です
- ・日時と集まる、とだけしか言われてないなら、多分リーダーから何かしらの返信がくるはずだよ、まずはそれを待つて決めようよ

この街の高校生が夜を徹して真剣に協議を語り合っていた

冷静で最もな意見、とても全員一丸で集まってくれる雰囲気ではない…

「さて、これを一つの力に束ねれるかは、きっと今日のあたしらの頑張り次第さねー」

ひよりのパソコン画面の後ろに立つて言う灯は、それでも湧いた逆境に楽しそうだった

「自覚させてやるぜ どうせ俺が私がいたつて何も変わらないじゃないかって思つてる奴こそが、この街を変えられる事を…」

「誰かがこんな臆病者のこいつらをまとめればいいんだ  
今日の残り半日で、今から262人の意識変えてやろう、動き出すきっかけを与えよう、」

相変わらず威勢のいい灯の声にあてられて、私達は携帯を握った

……

そうして作業を進めていたときだつた

不意に、そこで一つの疑問が生まれた

思えば、昨日はツイッター や自分の携帯の作業で手一杯だつたから  
見れなかつたけれど

(…リーダーつて )

一体、差出人を誰で送つたのか？

この顔はその誰の為に動いているのか？

不思議に思い、昨日ひよりの一斉送信したメールと奏の書き込んだ  
トピックを携帯で読み返すと

(ユーザー名…みどり?? )

ユーザー名、管理者…みどり

そう、今は眠る高ニの創設者の名とカルマが、しつかりとこいこで受け継がれていたのだった

述べ262人の弱者をまとめる、絶対的トップブリーダーの名だつた  
代理とはいえ、騙しているとしても、私達はその偉大な主の名の想  
いを抱いて使つていたのだ

‘繫がれた繫がり’なぜかそれを知つた瞬間、携帯を握る手のひら  
に温かく込み上げたモノがあつた

そして、私も作業に戻り、作戦を考える灯を除いて、他四人はパソコンと携帯からメールを一件ずつ丁寧に返信していく

違和感のないよう、何時間もかけて、皆それぞれ文章をひよりの言葉に近づけた

好奇心を「与える言葉

現実を無視して動きたくなる衝動を「与えるの言葉  
ワクワクするような青春が目の前に迫る言葉

‘退屈なんてもつたいたいぞ’

青春映画を見た後の夏夜の「うずき」にも似た瞬発力だ

きっと一ヶ月前の私なら迷つて、でも行つてみたって思う、抑えきれないほど強い言葉で返信メールは溢れていた

‘何十年と続く　そのたつた一瞬の夏の終わりだけ、世界を変えてみたいんだ！’

‘総動員で夏のいたずらをしたいんだ！’

戸惑う心を揺らして、掴めるその先262人を四人は誘いに行つた

……

朝から同じ体勢で座り、お昼も過ぎた頃、だつた

ふと、いかにも悩んで作戦を考えていた灯が店内に声を発した

「ねえ、みどり団を更にまとめあげる方法だけ？」

「何か思いついたの？」

灯は作戦の他にみどり団を一つにする方法も考えていた

「めっちゃ簡単さけど、何かの団体こなロゴマークが、団員こなアーティマークが、やっぱ重要だと呪うさよね」

「マークにやう？？」

灯が口にした事

共通の証、共有の印、同じ志を掲げる旗

単純で子供騙しではあるけど、それは人が多ければ多いほどチームワークと団結力を上げる

まとめにまは確かに悪くない方法だった

国に立ちは向かうヒーローや、正義の旗を掲げた最強のチーム

秘密基地や自由帳に書いたマークや、同じ物を友達と揃えて楽しかった小学生のときのよつて

大人になつても、私達は少なからず心のどこかでそれに憧れてしまう生き物なのだ

恐らくメールとトピックを読んで考えたのだろう、なんとも灯らしいユニークな案だった

「確かに、なんだか制服以外にも一つになるチームの象徴的なマークが欲しいのです、みどり団らしい」

「でしたら、これなんてどうでしょう?」

一人黙々と作業を進めていたひよりが手を止めて、周りの三人に提案した

灯がぬぬーっと近づき、有珠と私も指された画面を見た

目を凝らしたそこには、サイトの象徴とも言える、掲げられた三つ葉マークがあつた

(みどり団のサイトの…だっけ? )

「 ッ! ひより冴えてるなつ 」

唐突に、前触れなく灯が悟つたようにひよりの意図を感じた

「はい、そういう事です 」

「え? 何が? 灯どういうこと? ? ? 」

「ほにゃあーつ 有珠には全くよくわからないのです また仲間外れなのですつ」

灯とひよりは、また二人だけ秘密な、意地悪な表情をして

「だからなあ、つまり 」

もつたいぶらせて、灯はカウンターの奥にいた奏に手招きをした

「……なに？」

趣向が分からず眠たそつなジト目を向けて、奏がとぼとぼ歩いてくる

「いの三つ葉マークだけど」

「五つ葉、にしちゃダメか？」

（……）

その言葉が響いた瞬間

「ツ」

よつやく全員が理解する

いにいのselling day×みどり団のメンバーの数の葉数

少しだけベタで恥ずかしくもある、でも誇らじい高校生のマークだ

selling day×みどり団のプロローグを告げる新しい旗

「……」

奏は少しだけ考え込み、姉の残したシンボルマークをじつと、じつと眺めていた

今まで一人で守ってきたそのマークを、五つに分けた葉が共有する  
とこう事に

今まで一人で守らざるを得なかつたそのマークで、仲間と共に強  
敵と戦うとこう事に

「…………」

そして

「…………いいよ」

何かに踏ん切りをつけるように、奏は深く頷いて了承した  
なぜかその顔は、少しだけ晴れ晴れとしていて、少しだけ寂しそう  
でもあつた

「…奏…」

残されたたつた一人の妹の視線は、いつまでも三つ葉に注がれてい  
たのだった

＊＊＊

さすがはひよりだ

ほんの数分とからず新しいマークがサイトに掲げられた

実際のところ、これだけやつてもみどり団メンバーの意識がどう変  
わつたのかは分からぬ

けれども、主犯五人の意識は大きく変わった

ここに集つた弱小の少女達は

隠蔽に汚れきつた世界の中に杭を突き刺して、三つ葉を掲げたみ

どりに、みどりさんに勝利を誓つたのだ

……

それから夕方過ぎまで返信作業を続け  
メールの受信もまばらになつた頃、ようやく大体の作業を終えた  
これで皆はどう判断したのか  
けれども、一人一人に送つた確かな文章に誠意は伝えられたと信じ  
ていた

やれるだけの事はした、満足にも近い達成感だつた

返信やトピックの「メントはどつなるだりつ

その結果を日の当たりにすのは決戦の日、当日だ

「…ふう 疲れた」

身体の力を抜き、勢いよくイスにもたれかかり、一日にこらめつこを  
していた携帯を閉じた

首をガクンと後ろに垂らして、前髪も後ろにさりと落ちて窓から  
空を見上げると  
辺りはすっかり薄暗く、身体の熱を覚ますひんやりとした心地いい  
風が吹いていた

作業に終えた五人全員には、努力の結晶のよつこ

その人差し指には豆が出来かけていた

\* \* \*

その後、私達は約一泊ぶりにお風呂に入つた

喫茶店を空にして、坂を下り、川沿いを進み、その場所を日指した駅のはずれにある団地地区の間にある小さな年季の入つた銭湯だった皆楽しげな足取りの中、灯だけは、どこか終始行き詰まつたような表情でぼーっとしていた

思えば、今日一日かけて灯が書いていた作戦用紙は、昨日からまるで書き足されていなかつた

銭湯に入つていた間、近くのコインランドリーでブラウスや下着を洗つた

お風呂あがりの生乾きの髪を涼しい夜風に流しながら、喫茶店に帰り奏コックさんと一緒に作った具だくさんカレーを皆で食べて

私達は、明日からまた始まる停学期明けの学校の準備をして眠つた

.....

三日間の内の一日が、あつといつ間に終わってしまった

これで何か変わったのだろうか

ハルを助ける手段へ、桐島さんと対峙する方向へ

たつた五人の女子高生は、本当に近づいているのだろうか？

明確な変化や兆しも見えぬまま、作戦も定まらぬまま

タイムリミットは刻々と迫つていった

同時刻・聖蹟桜ヶ丘男子高校・屋上・

日曜日の夜はひときわ寂しい、明日から週が始まると思ひつと、こんな年になつてもため息が出るときがある

あの頃とは違ひ、希望も夢もなく、やけに現実的な空に視界はゆつくつと弧を描き

年月を重ねて久しぶりに立つた屋上は、いつの間にかこんなにも狭く感じるようになつたのだろうとしんみり思つ

もう一ヶ月ほどになる、斬られた腕はまだ包帯が巻かれたまま、僅かに治りかけの傷口が痛む

「さて、どうしたもんかな」

ただそんわけでも、あれよりは随分短くなつた前髪と輪郭を流す屋上の風は、あの日と変わらないままなわけで

「逸希が終わらせると決めたなら……」

腕つぶしを後ろに倒すと、か細い金網は体重の重みできしりと鳴き、頼りなく揺れた

今ここには、十年も前に卒業した三人の大人がいる

天文部に青春の全てをかけ、大嫌いな大人の仲間入りを無事に果た

した背広姿の三人だ

不在の逸希を除いたその三人、あの頃の逸希風に言つながらば

どこにでもいそうな冴えない顔の 五十嵐 日向

茶色の髪に前髪をヘアピンで止めた背の高い 羽鳥 康介

真面目やつな顔に黒ぶち眼鏡にそりそりの髪の 中島 京

今に言つながらば

どこにでもいそうな、ひょろこサフリーマン姿の 五十嵐 日向

後ろ姿はモルモットのよつた茶髪をした、ネクタイピンの似合つ  
羽鳥 康介

真面目な社会人そのままに、細い眼鏡にそりぱり切り整えられた髪  
の 中島 京

私の名前はその一番上だ

「もうここも十年以上前かあ…、つたく早えよなあ 」

それなんとも言えない距離を保ち、金網を鳴らして、まったく  
嫌なほど落ち着く景色と空を懐かしんでいた

そして十年の歳月の変化を悲しく感じていた

「まあ色々あつたしな… それぞれ 」

あれから経つた、本当に…残酷なほどに経つた

今より一回り小さな身体で、四人は夢心地になつてここから天体望遠鏡をかざしていた

(……)

けれども、同じ場所から見たあの広大な星空は、見上げてももうどこにもない

あるいはヒステリーを起こす月、あるいは雲に覆われた夜、作りかけの街との煙がかつたモノクロの霞み色だけだつた

こんな狭い場所で何か凄いモノで溢れて走り回っていた制服姿の少年達は、立派に三十歳になり

… 色んな角度から社会を知り、それなりに夢にも敗れ、経験し

そして一端に汚れ、三人は通り魔に腕を斬りつけられた

「はあ…つたよ、こんな大人にだけはなりたくないなかつたよなあ  
ぼやいた康介の茶髪が冷たい風に揺れる

「一年もお袋さんに隠し続けてきたのに セつかくあと一歩なのに、本当に今なのか、全部終わらせるのは

「それでも逸希は決着をつける事にしたんだろう、このメール、は  
そういう意味だろう

京が眼鏡を力チャリと中指で掛け直す

「けどよ…下手したらあいつは死ぬ事になるんだぞ  
俺にはどうも納得出来ねえ、あいつが仕方なく、追い詰められて残  
された選択がこれしかねえから、だからしじょうがなくもう終わらせ  
るつて、つまりはそういう理由での決着だろ」

「まあ…元から所詮私達人殺しの事情など、家族を殺された者にと  
つては償いを猶予する理由になどなるはずがないのだからな

自業自得、罪があるのは全てこっちなのだから、待ってくれなど言  
えるはずもない」

取り乱す事もなく、ただただ白けた空気が血管の浮き出た腕を冷や  
し、金網にかけた指をじんとさせて

夕飯時の街の音が遠くぼんやりと響いていた

「はあ、決着かあ、逸希は、逸希の嫁さんと娘は、…なによりお袋  
さんは、どうなつちまうんだらうな」

「逮捕だらう、もちろん私達三人も 残り数日後には」

あとは時間が経てば、隠蔽された轢き逃げ事件も  
奇つ怪なウィッチの連続通り魔事件も

そして斬られた被害者の謎も

警察とマスクミがきれいさっぱり解決するだろつ  
議員が幼い子を轢き殺した大スクープだ…

「あいつが一年かけて決めた以上、私達が今更出来る事はもうない

のだろう 「

言い終わり、スーツの胸ポケットからタバコを取り出して、京は口にくわえた

吹かした軽い煙は、ヤニ臭く街のほうへと物寂しくたそがれていった

「タバコ、やめたんじゃないのか 」

「……色々と、吸いたくなるときがあつてな 」

「… そ う か 」

(… だ ろ う な )

ほんの前だ、逸希が三人にメールを送つてきたのは

決着をつけるといつ素つ氣ない文脈の内容だった

けれども最後に付け加えられていたのだ

その決着の代償に、お袋さんが息を引き取るその瞬間までは事実を隠し通したいと

その苦渋の決断に至つた理由は、ある五人の少女との出会いだったらしい

不運にもこの事件に巻き込まれた、私達の十年前にはあつたでどうモノを今も持つている別の被害者達だった

責任、という逸希の言葉に、私はそれだけ聞いて納得した

だから当曰、あのウイッチの少年がたどり着けたときは罪を認めもし来れなかつた場合は、母の残り僅かな命の最後まで罪を隠すなどと、終止符を打つ決心をしたのだ

そんわけで、共犯の私達三人が出来る事は、虚しくももうないわけでただどつちにしても、最後には天文部は捕まつてしまふのだ

今更大きな悔いはない、一年前に罪を償わなくてはいけなかつた人生なのだから

これだけ遠回りもした、もう三人は十分だ

ただ、一つ欲を言えるのなら

もう一度だけ、もう一度だけ…

何も知らなかつたあの頃の夏に帰つて、ここで望遠鏡を囲んで天体観測をしたかつたなあ

立ち込める空を見上げて

なぜか、頭の中では翼を下さいのメロディが寂しく高く流れていた

……

あの頃ならなんでこんな高いもんをと感じていたであろう一二十円の缶コーヒーを、私は飲み口を噛んで飲んだ

「 なあ 日向、京 一つだけ ちょっとといいか 」

何をするわけでもない、終わりの前の思い出に浸っていたときだった

ちょっと気になるものを見つけて、と康介がポケットから携帯を取り出した

「 ……？」

「 どうした？」

何年前の機種だろう、傷が目立つ薄型の携帯を康介は開いた

「 もしかすると、あの女の子達、の仕業かもしけないと思つ節があつたんだが 」

歯切れの悪い口調で言い、康介は携帯の画面を見せた

すっかり暗くなつた街並みを背に、一人がコツコツと靴を鳴らして行くと

「 …… みどり団？？」

「 SNSサイトってやつか、懐かしいな 」

画面はウェブサイトに繋がっていた

珍しい、五つ葉のマーク、が描かれていた

「 多摩地区の高校生専用の小さなSNSだが、つい最近 気になるトピックがトップらしき人物から送られてきたらしい 」

「 それがどうしたんだ？ どうせオフ会とかだらう 」

「いや、書かれていたトピックの内容は、登録したコーナー全てに  
向けて、十月一日に集まれないか」という内容のものだつた」

（決着の日か…）

「仮にもサイトのリーダーの書き込みだぞ  
それにこれは登録者しか観覧が出来ないようになつていて……俺  
にはどうも上手く出来すぎてるようになつてしか思えない

どうしても、当口に邪魔をしに行くから皆協力してくれと、書き込  
まれてているように見えちまうんだよ」

「さすがにそれだけで決めつけるのは早いだろ  
ただ確かに、これが本当だとしたら、可能性がないわけではない  
高校生という点も引っ掛かる」

携帯に表示されたサイトを見つめ、冷静に京も相づちを打つた

先にも言つた、私達はもつ出来る」とはないのだと

しかし、逸希不在のこの街での少女達がまだ諦めずに戦おうとしているのならば

仲介をしようとしたのならば

それは話は大きく変わつてくれる

逸希の、せめてもの最後の願いだけは成し遂げさせたい

それが捕まる私達の望みなのだ

それが、死ぬかもしれない事を百も承知の上で導き出した逸希の決断なのだ

出来ることならやりたくない、けれども不安要素があるならば阻止しなければならない

‘どれか一つを手にすれば、どれか一つを必ず壊す’

悲しくも、それがこの街の仕組みなのだから……

共犯者とこう理由ではなく、仲間だからやるんだ

「少し、調べておこうか

.....

そして、私達は懐かしい夕闇の屋上を後にした

ほか弁と歯みがき粉を駅前で買い

近々連絡を入れる、とだけ言葉を交わし

それぞれ夜の聖蹟桜ヶ丘で散開した

## 第10話

・9月29日・(月)・2日目

快晴な日差しと秋晴れの週始め

今にもトランペッタの音色と小鳥のさえずりが聞こえてきそうな新鮮な通学路

「 ていうか、なんで誰も田舎ましセットしてないの？！？」

早朝から、女子高生五人はいろは坂をダッシュで駆け下りていた

髪をぐしゃぐしゃに、肩のカバンを跳ね飛ばせ

街一番にそびえる丘から一望する開けた世界と平行して走っていた

相変わらず私達の非日常は、停学明けだらうと、初っぱなからそんな常識はずれのドタドタ劇で始まつたわけで

……

きつかけはつい先ほど、一番先に起きた私が眠気まなこで携帯電話を開いたときからだ

紅茶葉の香りのする店内で、眠気も抜けきれない頭で、画面の「デジタル時計に閉じかけの重い瞳を向ける

気分的には、すでに起きていないならない七時頃を差している  
と思い  
あぐびと共に少しだけじんじんするお尻を上げようとした、ときだ  
つた

(……あれ)

重大な異変のズレに気がつく、タイムスリップをしてしまったと思  
うほどすっからかんに飛んだ一時間の時刻に

(……)

いいほうじゃなくて悪いほうで

合わない焦点で見る、見直す、一度見三度見する

見返すたびにしつかりくつきり現状を理解する

(……最悪だ)

その瞬間、頭の血がスースと引き、たちまちまぶたが冷水でこじ開  
けられるより強烈な現実に目を覚ます

そう、疾うに玄関を出でいるはずの、八時ピッタリ、に時計は刻ま  
れていたのだった

「！？、八時！？ッ」

一人大声を張り上げて飛び起きる、けれども時刻は変わることなく  
進んでいく

今から走ってもここから学校までは最低三十分はかかるのだ

這い出して、太ももを無防備に露にしてテーブルにべつたり眠る灯りの肩を擦る

「灯っ！ 起きて やばい、遅刻だよっ！」

「うぬ…灯さんは本望だ…」

「いや、寝ぼけてる場合じゃなくて！ ほんとに早く起きてッ！」

灯の身体を強く揺さぶると、むくりと上がった頭が、まるで赤ちゃんのようにふにゃふにゃと前後に揺れる

ふと、テーブルのほうを見ると、落書き数個と白紙のノートが置かれ、端が覆い被さった灯の身体のせいで折れていた

それは確か、昨日皆と寝たときにはなかつたものだった

「ひょりっ、有珠っ、それから奏もつ 皆もつ八時だよ！」

呑気な眠気が浮かぶ店内にピシリと緊急事態の声がサイレンの如く響く

それはそうだ、私達にはただの遅刻じゃない

仮にも私達は謹慎を受けた問題児、その停学明けだ

登校初日で遅刻なんてしたらそれこそ先生にこつぴどく何を言われるか分からぬ

しかも揃いも揃つて五人全員が遅刻だなんて、前科のある私達が怪

しまれないほうが不自然だ

そして、私達は朝から騒がしく店内を走り回つた

ただ唯一、制服を着ていた事だけは救いだつた

朝ごはんも食べずに軽いカバンだけを握りしめて、ついでに誰かに足も踏まれて

ローファーを履き潰して

私達は何かに追われるようになり、前のめりに勢いよく喫茶店の扉を開いた

\*\*\*

「 ていうか、なんで誰も目覚ましセットしてないの？！？」

「知らないさよ！ 灯様の性格知つてるだろーっ もうー 」

そして、今はこうして揃つて下り坂を疾走している

スピードに流れる雑木林の木漏れ日から見えた空には、薄い雲が高く浮かび、まるでゆつたりと地上とは別の時を泳いでいるように見えた

宅配物を乗せたバイクが走る私達の脇を軽やかに通過していく

「はあはあっ、あたしはてつきり他の誰かがセットしてると思つてたのに一つ見損なつたぞお前ら」

「ほに」やー、有珠はひよりがしてると確信してたのですー

「皆さんすみません、私は喫茶店の奏ちゃんか、ゆりちゃんがやつてこると思つていました」

若い空氣の漂う朝っぱらから汗を飛ばして、昇り始めた太陽を追い越していく

土に溜まつた夜の水分と根っこの香りが鼻筋を涼しげに冷やしたけれどもなんだか、停学明けに全員遅刻のピンチにも関わらないはずなのに

待ちに待つた新学期の朝にも似て、動き始めた街と共に不思議なほど心はワクワクと浮かれていた

「つてー!? 奏ー!?、ちゃんと走つてよー」

「……む…ボクは走りたくない…」

ふと見ると、一人後ろでとぼとぼと奏が歩いていた夜以外に動く奏の姿は何だか見慣れない光景だった黒のベストを羽織り、相変わらずの仏頂面に長いスカートを垂らして、青白い肌とは真逆の真っ黒のジト目を向けていた

それからとこりもの、どうにか奏を前へ走らせる努力をした

「…………」

しかし疲れるたびにブツブツと

「……ボクを怒らせると……一千を越す軍勢が黙つて……」だとか

「…もう…ボクはいい…構わぬ先に…」だとか

走りたくないのか口数の少ない奏が最後まで「厨」一的抵抗をしていた  
そのたびに灯や有珠がなんとか走らせて、葉や物で釣つて奮起  
した

裏道を使い、路地の抜け道を掻い潜り

そしてようやく、朝のホームルームのチャイムと同時に学校の門の  
前にたどり着いた

校舎の窓はすでに開かれ、白いカーテンがパタパタと揺れているの  
が見えた

「はあはあ、着いた…」

アクエリ亞スが欲しい汗の量、けれども夏とは違つた気持ちのいい  
爽やかな汗だった

休日みたく誰もいないひつそり静かな生徒玄関で、田口も止まらぬ  
スピードで靴を履き替え

朝日が射し込む階段に足音を鳴らしてそれぞれの教室を田指した

そして奇跡的に、先生が来る一分前に私と灯は窓辺の席に着いたの  
だった

息を切らして、机の上にぺったんこのカバンを投げる  
他の生徒はほぼ全員座つていただけに、かなりに浮いてしまった

そしてそれ以前に、一週間も欠席していた一人にはひそひそと白い  
目が向けられていた

「…ねえ、なんの なんである子達揃つて休んでたの？」

「なんか噂だと警察に関わるよつた事して停学だつたらしいよ…」

「つか普通にウザい、いっそ退学かそんままヒッキーになつてくれ  
たほうが楽だつたのに」

「別にどうでもいい、はあ、今日真剣に眠い…」

「ここに座ると自分たちの現在地がよくわかる

群れの中で、筋書き通りにけなされている感じだ

（…まあ、しょうがないよね ）

口の中が苦い睡で溢れて、身体が縮む感覚を覚える

よくはない、居心地も良いとは言いがたいけど

今はいい、これでいい

この全ては私が選んだ道だ

負けたわけじゃない、逃げたわけじゃない、田を背けたわけじゃない

勝つために選んだんだ

その日常を捨てた代償のつけはきつかりに溢れている

その日常を捨てた成果もきつかりに溢れている

主導権はそちらでいい、どうぞ好きなだけ枠の後ろで批判して笑い飛ばして下さい

ただそんなもんでもぶれるほど、私達の軸はもう弱くないから

こんな私達にしか変えられないものもあるんだ

全て一瞬で失うリスクと隣り合わせで、私達はこれっぽっちの余力も残さず叶えようとしているんだ

一ヶ月前、打ちのめされる事が怖くて裏に隠れていた小心者を捨てて、今は素の自分で真っ直ぐ勝負して傷ついている

馬鹿なほど微塵も疑わない、きっと出来ると自分たちの可能性を信じきっている

それが何にも増して、例え現在地に座つても搖るがない事を誇りに思つた

(……)

黒髪に流行りの髪型、中には夏休み中に茶色に染めて直したのか、  
黒が抜けて薄く茶色がかっていたり  
ポケットからは携帯に付けた大きなディズニーのキーホルダーが垂  
れている人もいたりする

(……)

ねえ知ってる?、そこにはいる限りね

いつまでも、順番、は回つてこないんだよ

\*\*\*

・お昼休み・屋上・

凜と澄んだ昼下がりの空、さりげなく浮かぶ白い月が思わず眠気を  
誘う

「秋なのにやーー」

「秋ですねーー」

複雑な街のうねりや巨大すぎる戦場は今はどこへやら、縁側か置が  
あつたら横になりたくなる昼休み

地べたにちょっとハンカチを敷いて、私達は腰を下ろしてお昼ご  
飯を食べていた

「ここやあ、部室が使えないのはやつぱり痛手なのです」

「 そりだね、でもさすがに無断で使って見つかつたら次はないもん  
ね 」

フェンスにもたれかかり、ストローをくわえたまま空を見上げる  
背の校庭のほうからはバレーをする生徒の声が響き、校舎には校内  
放送が流れている

他の生徒がいる教室や廊下で食べられるはずもなく  
私達は花火大会以降いつそう肩身が狭くなってしまった

部室だった教室は固く鍵がかかり、最終的に生徒のいない屋上に追  
いやられた

それでも、それぞれにコンビニで買ったパンをかじり、飲み物を含  
んで笑みを転がしていた

「 あか…り ？」

ただ一人、その策士だけを除いては

（…灯？？）

朝からヘッドホンで耳を塞ぎ、完全に雑音を遮断していた灯は

今私の声にすら応答のない、そして今までに見たことのないよう  
な浮かない顔をしていた

食べられた形跡のない大好物のパンを片手に、空白のノートをまる

で新聞紙でも読むかのような渋い顔つきで睨んでいた

端の折れた、朝に見たあのノートだった

思えば今日の四限、いや… 昨日の夜からずっとだ  
灯は自分から話しかけてはこなかつた

終始ノートに向かつて、作戦を考えていた

多分、今日の寝坊の原因は灯だけは仕方なかつたんだ

だってなぜなら、昨日の夜、皆が寝静まつた後で

灯だけがたつた一人徹夜をして、人知れずずっと作戦を考えていた  
のだから

ただそれも、これほどの時間を費やしても、具体的な作戦はただの  
一ページも進むことはなく、折れ目のページから進めないままだつた

考えられたほとんどの文字はボールペンの黒でぐちゃぐちゃに塗り  
潰されていた

「…ぐち…」

誰から見ても、灯は間違いなく行き詰まつていた

タイムリミットは明日まで、もつ明日だ

いつもなら、あのひらめきで灯らしげ逆転の作戦をバンッと思いつ  
くはずなのに

初めて突き当たつた、スランプ、まさしくそういう日だった……

「ひより またメールチェックしてますか？」

さつきコンビニで買ったジャンプを脇に置いて、ひよりはまた携帯でヤフーメールを確認していた

「はい、新しい人からのメールは出来るだけ返信したいですからね

」

「そうですねー、有珠もみどり団をまとめるトレンドマークとか何か思いつかないとです！」

そつ言いながら、有珠は携帯で当日の天気予報を確認している

皆、後は灯の作戦待ちだった

今までどんなピンチも救つてきた百戦錬磨のリーダーを信じて、誰も疑つてなどいなかつた

（……灯……）

本当に、間に合つのだろつか

例えみどり団が使えても、例え五人の欠けてしまつた能力を駆使しても

どこにいるのかも分からぬハルの殺意を取り除き、更には警察とグルの桐島さんの元へ無事に導き対面させる事は

それだけじゃない、それ以前に有珠の言つたよつて、あと一押しで団結出来そなみどり団の山積した問題だつてある

「…ねえ、灯 大丈夫？」

いつも中心いた元気な女の子は、少しだけ輪からずれていて

迷つたけれど、私は添つように声をかけた

「な、なはは…っ、ゆりくんなんて顔をしてるんだいっ、大丈夫さ  
よつ なにがなんでも今夜までには作戦完成させるから 」

「…………」

なんて顔をしてるんだ、それはこっちのセリフなのに

私の気持ちを悟つたように、根拠のない空元気の笑みを灯は向けた  
心配させないように笑つてた、細い眉毛は、ひどく垂れ下がつたま  
ままで

いつもの灯じゃないのはすぐに見てわかつた

きつとリーダーが初めてぶつかった、迫られた重圧、プレッシャー

「…ねえ 灯 」

「ホント…わりい、絶対なんとかするから…っ 絶対 」

隙間だけのしょぼけた声を呴いて、灯は避けるように視線を逸ら  
した

（……灯 ）

「のままじゃ、灯だけじゃきっと、これは乗り越えられない…

今回ばかりは、とても一人じゃ勝てない、どれほど困難で難解な問題かを灯自身が何より痛感している、そう確信した

こんなとき、仲間が困っているとき、灯、ならどうしてた？

難題を独り抱えたくせに、元気に振る舞つちゃう不器用な本人に、どうする？

力を失った私になら、何が出来る？

作戦のアイデイア？

だめだ、何にも思いつかない

励まし？応援？

今の灯にはそんなものの邪魔なだけだ

（……違つ、灯なら ）

影の優しさなら、こうするツ

「ねえ、灯」

「…？ なんさ」

‘折衷的共有案’

欠けた能力を一つのアイデイアに凝縮させる

初めて、作戦を‘全員で’完成させるんだ

今度は私達が、灯をサポートするんだ

「 皆と 図書館に行こう 」

私は、裏返った声で強くそう言ひ放つた

放課後、ヒビの入った灰色の校舎は西口を受け、部活動の生徒だけの声が佇む風景に静かに流れていった

生徒の消えた廊下は冷たく、窓ガラスから踊り場にまで伸びたオレンジ色がどこか物寂しげに辺りに影を作っていた

そんな景色とは真逆に、五人は真っ直ぐ足音を響かせて、立ち並ぶ教室を走り抜けて衝動を放つていた

階段を飛び越えて、暗い生徒玄関でローファーのかかとを踏み潰し、焦げ色のちぎれ雲の下、香りたつ広いグランドを駆け

そして図書館へ続く駅前の雑踏を進んでいった

あの後屋上でひよりに話すと、すつと立ち上がり、一つの間も開けず、然も当たり前のように胸の底から出した息で受け止めてくれた

むしろ喜んで微笑み、瞳にかかった前髪を揺らして、そして包み込んでくれた

「灯ちゃんにはいつも助けていただきましたからね  
全員の知恵を絞つても、必ず今日中に考え出してみせましょう」

そう言って、ひよりはぶかぶかのカーディガンからちよこんと出した指先を胸元に当てて、キュッと握りこぶしを作つてみせた

頼もしく、続く青空の下で純白の有珠と夜色の奏も頷いた

＊＊＊

もう後のない、危機感を滲ませながら刻々と終わりに進む世界

夜へと残された僅かな一口は、穏やかだつた日中を塗り潰すかのように、乗つ取つた墨色を街や電柱に蓄えていく

傾く夕日を背に受け、行き詰まつた夢の中、闇に閉ざされた最後の答えを田指して

お昼休みに叫んだ私の言葉通りに、この街の知識が集結する図書館に大きな期待を抱いて、並木通りから駅へと歩いていった  
加速する支配された夜に反抗して進んでいると、それだけでなんだか無性にワクワクしてくる

必ず何かを呼び起こして、こんな街を変えてみせるんだ

絶対的エースのピンチを、今度は私達が支えてみせるんだ

ブレー キなんかぶつ壊して、風を切つて丘からスニー カーで飛び降りたい

‘何かを掴める、そんな気分になれるんだ

けれども、ただその中心にいる張本人だけは…

「…」ごめん あたしが出来る事はこれだけだったのに、キャプテンなのに、あたしの力不足で…」

未だに完全には乗り気になれず、まだ重い重力を背負っていた

「気にしないで下さい、信じて下さい もう一人で考え込まなくてもいいんですから

ただほんのちょっとぴりだけお願ひします、私達に途中までのアイデアを預けて下さい その代わりに、完成させますから」

「でも…、あたしの唯一の役割なのに、責任だつたのに…」

灯はこのチームをずっと先頭で支えてきたリーダーだからこそその後ろめたい気持ちを滲ませていた

一番大事な局面を果たせなかつた才能が、頑なに負の荷物となつて引きずつてしまっていたのだ

「大丈夫だよ、大丈夫、心配ない、僕たちがついてるじゃんか  
絶対、僕たちで灯の続きをやってみせる 今度は僕たちが頑張る番だ」

「……ボクも……」

出来なかつた事に落ち込む灯の背を押して、有珠は僕に、四枚の欠けた能力は、個々に力を高めていった

それぞれに磨り減つた能力を補う為に、私達は一人で一つ、それでも挫けるなら五つで一つの能力を掲げるのだ

「 作ろうよ、私達の最後の夢を 」

「…」めん、本当に「」めん… 肝心なとき、「」こんな最後の最後で力不足で… つ 「

初めて、灯が一人で出来なかつた

進む為にその唯一無敵の取り柄を譲る、今まで努めてきた立派なポジションを皆の望みの為に閉じる

ある種の敗北感、挫折感

……積み荷を下ろす

それがどんなに苦しかつたか、悔しく情けない事が

そうして促され、肩を並べたリーダーの表情は複雑に、少しだけ涙を浮かべていた

「悪い…あたしだけじゃだめだった…つ だから、だからこれから一緒に作ってくれ…」

辛く灯は、勝つために能力を託して、支え続けてきた自分の世代を移すように泣いた

一生に一度味わうことが出来るかも分からぬ夢を、再挑戦する為に、泣いた

\*\*\*

市役所のような整備された明るい階段を上り、私達は駅近くのショッピングビルの一階に入った図書館に来た

自動ドアが開くと、しんと静まり返った落ち着いた弱冷房の空間が広がり、私達より先に高校生や大学生が学習机を埋めていた

本棚は奥までびっしり並び、それぞれ細かくジャンル分けされていたこの閉ざされた幾つもの本の中に、必ず最後のパズルのヒントが眠っている

立ち構えると、プラスに持つていける期待感が膨らみ、たちまち鼓動を早めた

現時刻は五時前、ここでの閉館時間は八時

その三時間までに必ず何かを得てみせる

勝つために個々のスキルアップを誓い、必ず最後にはやり遂げてみせる

なんてことない、もう一度始めたあの夜から覚悟していた逆境だ、ちよつといこハンデだ

「じゃあ、さつそくやうつか

学習スペースに適当に空いていた六席の長い勉強机に座り

それぞれにカバンからノートやペンケースを取り出す、捲つていたブラウスの袖口を更にぐつとたくしあげた

そして、本を探しに図書館の各所に散る

制服に身を包んだ周りの男子生徒達は耳にイヤホンをはめ、スラスラとペンを走らせ、本とノートとを交互に目線を移していた

たまにこちらに視線を移しているのも分かつたけれど、私達は気にせず作業に取りかかった

古びた木の匂いのする棚に歩きながら目をやり、頭上高くまでびっしりそびえる本に思わず眉を寄せてしまう

有珠は、三脚を跨いで埃を巻き上げて音楽知識や変装の本を取っていた

ひょりは地道に歴史的な革命が綴られた書物やパソコン知識

奏は入り口に設置されたパソコンで館内にある本を検索していた  
灯は白色のヘッドホンを耳にしたまま、サスペンスやトリック小説やミステリー小説を積んで持ってきた

私は、手当たり次第使えそうな犯罪の手口が書かれた資料本や、一番太い聖蹟桜ヶ丘駅周辺の地図の持ってきた

受け皿のようにした両手の上に重い本を乗せては運び、あつという間に細長い机の上は厚い本だらけになった

「ところで灯？ 具体的に作戦はどんな感じに出来てるの？」

うんと頷き、音漏れするヘッドホンを外して、灯は開いたノートを手から手放した

そこには、当日にクリアしなくてはならない課題が一番上に書かれ

下には使えそうなツール

つまりはみどり団に、今までの作戦で培われた経験や

灯の行動力と瞬発的な発想力

ひよりのウェイザード

有珠のスイミーとギター

奏のネットワーク

しかし皆の能力を最大限に使う作戦のシナリオは、そこからは空白だった

「ゆりでもだめだった、一夜でハルの殺意を取り除く方法がどうしてもあたしには分かんないんさよ」

「まずはそれを今から階で探しましょう」

一つずつ課題をクリアする為に、私達はアイディアと方法を手探しに探して本を読み更けた

めぼしいものは自分たちのノートに一つ残さずびっしり書き止め、また本を読んでは、別の本を棚から引っ張り出す作業を続けた

あつという間に時間は過ぎ、もつ七時を回った頃

空も更け、空席も多くなつた学習フロアで、人一倍様になつて読み更けていたひよりがうんつと伸びをした  
背骨をポキッと鳴らした合図と同時に

「そろそろ使えそうなアイディアを一つにまとめましょうか 」

情報収集は、そこで一旦取り止めになつた

そして、ついに灯のノートに女子高生五人の知識を絞つた大作戦が  
一つの形に育て上げられていく

寄せあつたノートに田を通し、数々の単語を見て協議する

ひよりは押収されたウイザードを諦めず、尙も底上げする方法や

有珠は素性の見つかつたスイミーをどうにか使えなか調べていた

奏はなぜか塗料やアートの教本

しかし全員が共通して読んでいたものは、大小革命的変革を記した本だった

「ひよりはウイザードは使えるんや?」

全員でノートに書かれたあの手この手を囲みながら、その中に座る灯が口を開いた

「明日中に新しいISBカードに即席で最低限組み込みます

ですが、前のように一年かけて作り上げたウイザードのようにはさすがに使えません

恐らく街の停電等の大きな事は不可能です、きっと見つかってもします

それでも、なんとか少しくらいは使えるくらいにはしてみせます

「じゃあ、具体的に監視カメラを止めたり、パソコンを覗く事くらいは???」

「場所にもよりますが、民間の場所で短い時間なら可能だと思いま  
す」

「わかった、アリガト」

すると、灯は自分の前に置かれた、あの作戦ノートに新しいツールとして書き込んだ

「有珠？ まだスイミーと、それからギターは弾ける？」

「スイミーはこのままじゃ使えないんですけど、変装の本を読んで、逆転の発想、で思いつきましたです

見つかっちゃった、皆とは違うこの見た目の有珠だから出来る、一度きりのもう一つ新しいスタイルのスイミーがありますです」

出会ったころの人前に出るのが怖かった、どこか病んでいた弱々しい幼い女の子はすっかり消え  
揺るぎない自信を見せて、有珠は嬉しそうに笑つてみせた

「ギターは、どこでも弾けるですよ むしろ弾けるなり、路上ライ  
ブしたいくらいなのです」

すると、思わず灯の唇の端がニヤリと引き上がった

リーダーのノートが彩りを増し、止まっていた何かが動き始める

「なあ奏、明後日までに新しい有珠のスイミーに必要なもの、ネットで揃えられるか？ 制服フェチさん」

「…………」「クリツ…任せて…」

奏は無表情で、けれどもしつかり頷いた

徐々にピースが形作られていく

閉館時間までもう残り三十分だ、急がないと

「では、どこにいるか分からぬハル君を助ける方法ですが」

「居場所が分からなくも、直接会うには、ゆりなら出来るよね？」

「え…と 私？」

いきなり振られてきよとんと驚いてしまった

「ゆりを中心に動いた、今までの経験と作戦を思い出してみ？」

その灯の言葉に頭がめぐり、一ヶ月の日々を辿る、そしてひとつひとつハツとする

あるじやないか、街中に私だけの、一ヶ月の末に積み上げた私にしかないハルとの繋がりが

「そつかつ、携帯探せて安心サービス！」

‘美弦のメールアドレス’

‘おうつ、あたしらが知ったあいつのカルマだ、絶対ハルは弟の携帯を持つてくだらう’

この一ヶ月動き回った事は確かに無駄なんかじやなかつた

私達は、幾つもの挫折の中であやんと成長していた

誰もが糸口が見えたと確信した

「…そのときだつた

「ダメですね」

おもむろに、呟いた少女

「ひより?、なんでだめなんだ?」

「それはですね、あれば前のは動かない物、つまり停車中の車だつたから偶然可能だつたんですよ」

「?.?.?.?」

苦い表情でひよりは淡々と続けた

「本来民間のこのサービスはGPRSの特定までに時間がかかり、数メートルとかなりの誤差が生じるもので、動いている対象物の正確な現在地を追跡する事に使うのは非常に困難です

それに恐らくハル君は駅前等、携帯の電波が強く正確に分かる位置にいない事は充分と考えられます

ビルや障害物などに反射してしまい…リスクが高過ぎます」

「…ほんやあ、いいと思ったのです」

有珠がシャーペンを握ったままショコンと眉を垂らす

「……ボクは……諦めない……」

( ？？ )

ボツへ潰れかけた案を、そこで新しい能力が懸命に支えつつじて  
いた

「奏？？」

「奏ちゃん？」

「……夜の街なら、誰より隅々まで…知ってる…」

奏のトラウマだけだつた日常が、時の経験となり甦る  
今まで引きこもりの高校生が制服を着て徘徊していた、ひどく辛かつた経験が、ここで主の今を支えるカルマの才能へと変化していく

「……誤差くらい…いりくんだ裏道くらい…全部ボクが把握出来る

…

奏は強く言つ放つた、踏みとどまつた

「奏アリガトや、でもやつぱりこなんなんじや、会えて…前の繰り  
返し、肝心の救う方法はないと思つ  
なんか、もつとでかくないと、どんぐん返しがないとだめなんだ  
思つ」

「……」

「でも、必ず奏のその力を使つときが来るさよ 絶対だ

「……つむ」

灯が冷静に語り、結局この案は振り出しに戻ってしまった

「ねえ、だつたら、いいで使おつよ、みぢつ団、」

内向きになる隙をとらず、今度は私が声を張り上げた

近づいてる、今一番勝つ方法へ近づいてるんだ

絶対にこの波を途切れさせない

「みぢり団か、どう使うかさね、ハルを助ける為に

ボールペンをぐるりと回して、イスを後ろに引いて灯が難しい表情を作る

僅かな沈黙が流れ、それぞれノートを見る表情が険しく曇る

（どう助けるか、どんどん返し…）

何か手はないのか、何か打つ手立てはないのか

逆境を打破する、可能性を呼び起しす何かだ

（何か……絶対にあるはずだ）

五分ほど経つた

膠着状態に溺れかけたそこで、ついに難題を潜り抜けたのは

根暗少女だった

次の瞬間

「 つ！ そうこえば…！」

（ビク…ッ ）

いきなり何かひらめいたように、解き放れたように、大きく大気を揺らしてまたもひよりが本をめくり出した

「ど、どひしたの？？」

らじくない行動に、私達は食い入るように凝視してしまつ

そしてその本は、ひよりの持つてきた、世界の革命が記された書物だった

「！」これなら…、「みどり団を使つなら、みどり団じやなきや出来ないと思つんですがッ 」

僅かに眼鏡をずらして、ひよりは自身のノートにシャツシャと書きつづつて見せた

皆でそのノートを前屈みになつて見つめる

「た、確かに実現したら使えそつだけど、凄いけど… でも待つて

ひより？ これに使う道具なんて明後日までに用意出来るの？」

見たそれはとてもなく大規模できつとハルも救う事が出来て

けれども実現するには

… とても明日までには用意出来るはずがなかつた

「……申し訳ありません、そこまで考えていませんでした  
ゆうぢちゃんのおっしゃる通り、確かにこれは現実的に無理ですよね

…

はあと氣を落として、今まで一番期待出来た策も、ことじごとくタイ  
ムコマリットの前に破れる

（… 明後日までになんて…不可能なのかな…）

「 いや 」

そんなどき、全員が現実色に顔を俯ける中で

「 一人、だけが鋭い声で勝機へ照準を定めていた

伏せた顔を上げ、目に飛び込んできたのは

静まり返っていた隣のリーダーのが、凛とした声と射抜く視線だった

（あか…り？ ）

「 灯ちゃん…？」

「不可能なんかじゃないよ、だってまだ一日もあるじゃんか  
今までの経験、最低限のウェイザード、有珠のギター」

傷ついた才能は再起し、身震いするほどの静寂をまとつて小さな息  
がしぶきを上げた

「で、でも灯？ もう明日だよ？ タスガの私達でも…」

「あたしを誰だと思つてん？」

「…え」

わからない、力強くこちらを見つめた黒目が私の胸を震わせた  
並々ならぬ氣迫めいたものに鳥肌が立つた

「ひょり、あたしに任せてくれ、出来る、これなら出来る、絶対  
繋げてみせるッ」

ついに、策士の頭脳が覚醒する

（…何かひらめいたんだね、灯）

来た、やつと来た、恐れなく不敵な笑みを浮かべるこれだ

あのいつもの、灯、だ

灯はいきなりヘッドホンをパチンと頭にかけ、大音量のBUMPの  
メロディをだだ漏れに耳に被せた

頭脳と平行してくるとは思えない速度でスラスラとページが埋まつ

ていく

一夜でハルを助ける手段、みどり団の役割  
居場所の分からぬハルを桐島さんから導く手段  
新しい奏をキーマンに、そして、ウイザードとスイミーの新しい力を組み込ませていく

憂さなんてすっかり忘れて、目の前に広がる「」駆走に興奮を隠せず、灯は腰を上げて異常なまでに感情を高ぶらせ、加速させた

「すみません、もう閉館時間なので そろそろ

そのとき、チャイムの音と共に迷惑そうに職員の女性の声が通った

「す、すいません、すぐに帰りますです、あと五分だけお願ひしま  
すつ」

たんと 真っ先に声を出したのはあの見知りの有珍だった

小さな身体でピシリと背筋を張つて時間稼ぎに粘る

せつかく策士の案が一線に繋がったんだ、あと少しなんだ

「はあ、はあ……ッ！」

瞬きも忘れ、ペンを持つ右腕の小指側を擦つて真っ黒にしながら

ガリガリザクザクとページが満たされ、幾つもの立ちはだかる壁をひっくり返していく

私達四人は、すぐに帰れるよう山積みにした本を元にあつた場所

へ戻していった

「ゆり、…ちよつといいか」「

その際、研ぎ澄まされた眼差しはノートを捉えたまま、灯は小さく言った

「なに?」

「本棚から、精霊流し（じょうりょうながし）、の記述が書かれた本持つてきてくれ」

そんな夏に使う物をどこで使うのか、それとも別に必要なのか

私には分からなかつたけれど、とにかく灯が求めている物を走つて取りに行つた

いつもそうだつた、私達じや到底思いつかない事を、灯は大胆かつ瞬發的に考えれくれる

そして、最後には勝たせてくれる

埃臭い奥の棚に行き、それらしき本を手に取り、たつた一人残した勉強机に走つて戻る

「これしかなかつたけど」

「いや、充分さよ、ありがとう」

久しく誰も触れていなかつたでだらう、時を経て茶色くすんだ薄い本を私は灯に委ねた

すると、矢のような勢いで見る見る一世一代の大作戦が紡がれてい  
つた

そして、業を煮やして困り果てた職員が一度目の声をかけようと  
たときだつた

私達は、出会つた

「はあ、はあ……　出来た……！　出来たぞみんなッ！」

髪をぐしゃぐしゃにして、あいつたけに右手を灰色に汚して

八時六分、私達の結晶、全てを飲み込む最後の勝利の方程式が完成  
した

「灯、最後の名前を教えて？」

「ワクワクするですっ」

「本当に、あれを明後日までに出来るのでしょうか？」

「……」

「行くぞ、」それで最後にする、作戦名……作戦名ツー。」

一歩踏み出すと「う」とは、踏み外すことと酷く似ていて

憂鬱に価値を失つて、途中で逃げ出したくなつて、いい加減閉じたくなつてしまつ……

「作戦名…ツ！」

それでも心配ない、諦めなければ、負け続けても  
例え接触さえ失つた身体でも

例え生まれながらコンプレックスの差別に苦しみ続けても

例え肩身狭く引きこもりに成り下がつても

例え自分の才能が挫折の前に閉ざされても

例え、体温を無くして騎士の星さえ取り上げられても

諦めなければ、諦めなければ、諦めなければ

「 作戦名えええツ！！」

そこには新しい何かが必ず待つてゐる！！

「 、Reincarnation」（リインカーネーション）

！！

図書館の外に出ると、駅は祭りの後のような、余韻の空氣に包まれていた

それは賑やかに橙色に騒いで、それでいてどこか寂しそうな冷たさもあつて

まるで私達を待っていたかのように爽やかに全てを染め上げていた

「皆、本当にありがとうございました」

軽くなつた両手を広い夜空にうーんと田一杯伸ばして、大仕事をこなした後の解放感にも似て、灯はくしゃりと笑つた

白い歯を見せて、間抜けっぽい跳ねた癖つ毛を揺らした

世間の物差しで見れば、そこにどれほどの意味があつたのかは分からぬ

たかが薄つぺらいノート一冊にロスタイルまで使つて必死になつて

今どき流行らないスポ根みたいに汗を流して、端から見たらとことん馬鹿馬鹿しくて

でもそれでも、私は清々しいまでに満足な疲労感と充実感を手にしていた

限界値を迎えた私達のリーダーのピンチを

今度は全員で紡いだ、その大事な大事な薄つぺらを築き上げられた

灯がこんな風にまた笑つてくれた事が  
本当に来てよかつたと、一緒になつてほこんた

「さて皆の衆、帰りますかー」

首筋を夜風に撫でられ、一区切りのあぐびを噛んで

澄んだ八時の空の下、綺麗にポツリポツリと顔を覗かせる星を見上げて

「なんだか今日はクタクタだよ」

「早くシャワーを浴びたいですね」

「おつ、だつたらまたあの銭湯行こうぜー」

「昨日行ったあの銭湯??」

いですね、もうぐりとお湯に浸かりたし気分です

いぢ  
れこ  
なが  
てす

۱۱۷۸۱

そんなわけで、まだ今夜は終わりそうにない  
日だまり喫茶店に帰るその前に

頑張った一日分の汗を落とす為、明日に備える為に

まるで本当の合宿のよう、一行は銭湯に行く事になつたのだった

ウイッチの現場兼停電が起きた大通りを過ぎ、車道を行き交うヘッドライトを越え

街灯も少ない、そよ風に傾ぐ草と微かな鈴虫の音色だけが響く川沿いの散歩道を行く

遠くに見える橋の上には、車や電柱の赤や白、たまに青色がまるでビーズように綺麗に向ひ岸まで並んでおりばめられている

「つい最近、一気に日が落ちるのも早くなりましたね」

ひよりの声に有珠がにやあと相づちを打ち、触りたいのか、頭をなびかせる猫じやらしの群れに何度も視線を奪われていた

土手の草むらのほうでは、最後の夏の名残を味わうように、父とその子どもが虫アミ片手に焼き分けている

私達の前には、Tシャツと短パン姿の男の人が家路へ歩いていた手にはコンビニ袋をぶら下げる、耳にはイヤホンをはめて、暗闇に気持ちよさそうに声のない发声で歌つていた

八時だというのに、小学生くらいの男の子一人組は茂るススキの草むらで遊び

捨てたられたママチャリを見つけたと声を放つ

半分壊れたような錆びきつたその鉄屑を、まるで探検家が宝物を見つけたように夢中になつてはしゃいでいた

(なんかいいなあ、いつこうのつて )

そんな穏やかな街の匂いについて笑みをこぼして  
当たり前の風景がたまらなく心地よく、そして幸せに感じた  
てくてく聖蹟桜ヶ丘男子高校も通り過ぎ、横切り、密集した団地地  
区を歩いていく

団地特有の薄い光が落ちていて、その周りを蛾が飛び回っている  
薄暗い景色を少し歩いて、昨日に来た  
随分と年季の入った、和み湯、と深緑色ののれんがかけられた銭湯  
に着いた

\* \* \*

きっと自分達が生まれる前よりあったその中は、まさに古き良き雰  
囲気を漂わせていて  
お年寄りや一人暮らしの学生なんかを向かい入れる優しい空氣に包  
まれていた

銭湯なんて小学生以来に久しぶりに来たけれど、やつぱり何か大事  
な風景がここにはある気がした

時代は移り、庶民の足は遠のき、それでも変わらず佇み続けるそこ  
に少しだけ寂しさも感じた

木で出来た小さな下駄箱にローファーをしまって、番台に座るおば

あちやんにお金を渡し、セリフなく挨拶をする

「おや、また来たんだねえ」と、眠るように猫背だったおばあちやんが丸い表情で会釈をする

「最近の子は可愛いねえ」と続けて気さくな笑みを向けられ、少しだけ照れ臭く、私は小声でありがとうございましたと頷いた

女湯と書かれたのれんを五人は潜り、脱衣場に入る

時間的にか、それとも普段からなのか、小さなそこに他の人の姿は見当たらなかつた

……

「ゆうー？ 昨日は灯さんスランプ中で出来なかつたけど もう復活さよ 安心しろ」

「いや、むしろそのおかげで安心出来ないから そんな凝視されても見るものないからね」

これまた木で出来たロッカーを開けて  
ブラウスの第三ボタンに手をかけたまま、隣の視線に意識して動かす手を止めてしまつ

恒例の如く、脱ぎかけた私の指先を灯がジーッと見つめていた

「ほにゃー ひよりおつきいのです！」

と思えば、いきなり有珠の声が脱衣場全体に響き渡る

「？？」

何かと思い奥に首を向けると

「いえいえ、普通ですよ」

普段はカーティガンの下に隠れている、高一とは思えない大人びたスタイルが映り込んだ

（やつぱりひよりつて地味にスタイルいいんだね）

眼鏡も外し、艶やかな黒髪とも相俟つていつそう美人に見えて、つい見とれてしまった

「全然普通じゃないのです、最低でも有珠はそんな身体になつたことないのです 悔しいので今度身長と共にこつそりもらつてしまふのですつ」

「ふふつ、それは困つてしまひました」

有珠はと言えば、見事に未発達のまな板だった

それでも、ひよりとはまた違つた理由で見とれてしまうのだった

透き通るよつな真つ白い身体、柔らかな銀色の細い髪とビー玉みたく大きな青い瞳

幼い表情と共に日本人離れした、まるで北欧の絵本からそのまま出てきたような一切の汚れのない純白の少女の姿

有珠は人とは違う身なりの特徴を全く気にせず、無邪気にひよりと戯れていた

ただ唯一、ひよりは誰とも直に触れないように気をつけていた

（それにしても、色んな意味でも同じ年とは思えないね）

そんなことをまじまじと思つていると

「なはまつ、ひよりと有珠が並ぶと酷だな」

「ちょっと！？」 灯

思つても決して言つてはいけない言葉を、灯はけらけら高笑いしながらズバツと言つた

「ほんやーつ、それはどういふ意味ですか？」

「なに、そのままの意味さ」

「むーつ

有珠は頬つぺたをふくーっと膨らませて、ハムスターのように愛嬌のある丸顔を作つた

どうやらこれでも怒つているらしく

「はははー、見るがいい」のグラマーちゃんの灯の身体をつ

調子図いた灯が脱衣場のど真ん中に立ち、大げさに制服をバツと脱ぎ捨ててドヤつとポーズを決める

まあ、ただそんなわけでも

「普通…」

「普通ですね」「普通にやうひ」

全員が声を揃えて、見たままにからつせし感情の入っていない感想を述べる

「がび」「ーん」「やめてけーー それー 普通つて言葉が一番灯さんグサシとくるから」

「じゃあ平均、または一般的」

「むーつ、そんな」と言つてないでゆりも早く脱げー！ ばか

矛先が私に向いたかと思えば、いきなり後ろから抱きつき攻撃に徹してくる

「うわあつ、わかつたからー、自分で脱ぐからー だからセクハラやめてつ」

なんとか暴走した灯の魔の手から脱出して、照れながら結局一番最後になつて脱ぎ終わる

気がつけば、 shinmari と寂しげだつた脱衣場からは外まで響く程の賑やかな声で溢れていた

「？ そういえば奏ちゃんの姿はどうじょつか？？」

「あれ、そういうば」「

小さな脱衣場をぐるりと覗渡しても、その夜色の少女はどうにも見当たらない

( もしかして… )

それぞれ身体にタオルを巻いて、浴場に続く扉を開けると

「……………じー」

大きな浴槽の真ん中にぽつんと、一人置物のように奏が無感情のジト田をじらじらに向けて浸かっていた

「つて！ なんで先に入つてんさよつー…」

まさかの灯のツツコミが破裂する

「……………ボクの素肌を見ると…君たちが石になるんだ…これはボクなりのせめてもの気遣いだ、ありがたく思え…………」

意味不明の奏空間が間に流れ、四人とも半分開いた口と身体が一瞬固まる

「え、えーと、ぶっちゃけ簡単に言つと素肌を見られたくなかったと?？」

「…ん…もう思いたければ…それでいい」

( なぜに…? なんで上から目線? ? )

肩まで湯に沈んだ奏と、強盗との交渉現場並みに絶妙に距離の離れた扉とで、なんとも変な会話を交わした後

中に入ると、もつたいないほど広いタイルの浴場も貸し切り状態だ

炭酸泉もサウナも水風呂もない

昔ながらの仕切りのない一つの四角い浴槽と数個のシャワーが付いていた

……

その後、シャンプー中にいきなり灯に冷水をかけられて、仕返しをしたりして

避けた流れ玉が間違えてひよりの背中に直撃したりして

お詫びに髪を洗つてあげたり、横では有珠が鼻歌を歌つていたり

裸なんて気にせず、すっかり贅沢な遊び場になつてしまつた

灯の右手の油性の汚れも、埃の匂いも、集中した三時間分の疲労も

排水口に吸い込まれるお湯と共に綺麗さっぱり流れていった

……

「はあ、気持ちいいね」

五人並んで、たっぷりの湯船にざぶりと浸かり  
うつすら頬を紅潮させて、肌を寄せる

高い天井に顔を上げて、ふうと絶妙の湯加減に目を細める

「もう明日ですね」

たちのぼる湯煙に落ち着いて、ひよりの声がタイルに反射した

「これから先、例えこんな風に全員が会えなくなつて、どんな困難が待ち構えてても、絶対有珠は最後まで頑張るのです」

年を重ねても、汚れ一つなくピカピカに磨かれた壁に視線を向け、誰もいない広い浴場に、全員がこの叶いかけた夢をやり遂げると誓つた

「大丈夫さよ!、叶えられるたゞの皆となら出来ない気がしないきつと結末を覆せるツ」

すぐつたお湯に前髪を濡らして、おでこを出した灯が期待に満ちたでつかい声を反響させた

「うん、そうだね」

そうだ、私達に出来ないわけがない  
きつと待ち望んだエンディングが待つている

戦意を団結させて、何も恐れずに私達は眩しいほど笑い声を上げた

それから少し、いい匂いのする湯船に顔を映して、肌になじむ感触につづつとした

「ねえ、皆?」

思わず、ぱーっと天井を見つめて、心の奥から出た本音を湯気と一緒に浮かべた

「はい？？」

「これが一息ついて、全てが終わつたら

「また一緒に、いつやつて銭湯にも来たいね」

＊＊＊

外に出ると、湯上がりの火照つた肌にひんやりと心地よい風が吸い付いた

「つたぐ、結局奏の裸を見れなかつたぜ　こいつは魔法使いか」

「…………」

後ろでは灯が澄まし顔の奏を悔しげにいじつてゐる

湯船から出て、制服を羽織り、下駄箱からローファーを取り出そうとしたときだつた

「いつぶりか、本当に久しぶりに、あんな賑やかな声を聞いたねえ

」

あ、と声を漏らして見ると、番台に静かに座るおばあちゃんが口を開いていた

「あの、『みんなさー』、『みんなにいつもかくしてしまつて……』

迷惑だったと思い、私は瞬時に頭を下げる

すると、おばあちゃんからの返答は大きく違つたものだった

「お湯は、気持ちよかつたかい？」

その表情はいつもと、見たこともない優しさに包まれていた

「あ、はい、それはとっても、全然家のお風呂とは比べ物にならないくらいで」

「やうかい、それはよかつた」

見ると、シワを蓄えた固そうな肌が嬉しそうに緩み、ただ少し寂しそうに頷き

そして見守るまゝ、元気に向けられていた

「またいつでも、ゆっくり、入りに来なさい」おばあちゃんは最後にそう言って、イチゴ味の小さな飴を私の手のひらにぽとつと落としてくれた

古びた人気のない銭湯は、お風呂より遠くて、漫喫とは違つて何もなくて

時代の流れにぼつんと取り残されて、いつかはこの街からも消える運命にあるのかもしれない

それでも、きっと変わらず胸を包む大事なものが、此処には残つていると

和み湯ののれんを背に、また来ようと  
夜中の団地の脇、まだ鼻に残る湯氣の香りを吸い込んでみるのだった

銭湯からの帰り

お風呂上がりの身体に涼風を浴びて、私達は来た道とは正反対に団地をぐるぐると回るよつとして駅へ帰ることにした

車の走る音も人工色も少なく

頭上にはつねにほどの星空が浮かび、瞳に押し寄せてくる

小さな公園を横切った辺り

少しすると、前方から香ばしい揚げ物の香りが漂ってきた

よく見れば、小さなお惣菜屋さんから一度揚げたてのコロッケがトレイの上にあげられるところだった

それはすっかり空いたお腹と唾液を刺激して、自然と私達は引き寄せられた

「おー、久しぶりにとんかつ食いたいなー」

屋台のつに油の熱気が立ち込めるお店の前で、灯は隠すこともなく豪快にお腹を鳴らすのだった

「ねえゆう、今日の夜ご飯はとんかつじゃ めー？」

「私は何でもいいよ、でも皆は？ 奏とか」

正直なところ、灯のお腹の音に釣られて私も食べたくなってしまった

「ふふつ、私も揚げ物は久しぶりです なんだか見ているだけでお腹が空いてしまいました」

「そこのカニクリームコロッケも食べたいのですー」  
有珠がショーケースの中を指差して無邪気にはしゃぐ

「……ボクも、いいよ…」

そんなわけで、寄り道をしたついでに私達は今夜の晩御飯をゲットした

サクサクのとんかつに、揚げたてカニクリームコロッケ、それから一口コロッケ

夏祭りの焼きそばを思い出すプラスチックの容器三つ分

灯が手に持ち、幸せそうに、一口コロッケをつまみ食いして頬張つていた

団地の自転車置き場では、部活終わりだろうか  
制服を着た男子と女子が自転車をベンチ代わりに挟んでは、どこか  
じつそりと仲良く話していた

団地も過ぎ、徐々に見覚えのある景色に戻つてくる

.....

辺りは一際しんと静まり返り、開けた一本道に差し掛かつたときだ  
つた

後は帰るだけ、心地よくウトウトとした意識でそう思っていたのに

(……ツ！)

‘ そいつ ’ は唐突に、隙をついて私のトライアの記憶をえぐりに現れた

何の前触れもなく、容赦なく、 ‘ そいつ ’ はやつてきたんだ

(……この道って )

何の変哲もない、ただの夜道だ

そしてそれは、一年前に死んだ私とハルがいた、現在奏の姉と桐島さんの母親が入院している桜ヶ丘中央病院へと続く道

そしてそれは、去年の夏、全てが始まった、轢き逃げ事件があつた  
という殺害現場

そしてそれは、取調室で桐島さんから教えられた、ハルの住むアパートへ続く道路だった

(……このは )

街をも巻き込む惨劇のカルマが眠る地

不意に足の感覚が鈍り、今まで皆無だった夜の不気味さが音を立て身体中を包み込む

「お？ どうしたゆりー？」

眠気など早々に消え、低体温者はバランスを失った世界に顔を伏せた  
闇の中で一本の信号機が向かい合わせに佇むだけの、氣味の悪い殺  
風景な横断歩道

立ち止まつた私に釣られて皆の動きも止まつた

「ここに…ゆり？」

すぐ前から不思議そうな有珠の声がしたけれど、今の私の耳に届く  
ことはない

（……「クリック」）

夜の色に塗り潰され、ぽつんと人通りもなく、まるで連續通り魔犯  
が生まれたままの無音の空氣だ

ここに、どれほどの人の人生が狂つたのだろう

そう思つと、血が染み込んだ焦げ臭そうな路上は、年月が経つた今  
でさえ事件の匂いを生々しく残しているようだ

押し潰された轢死体が転がつてゐる様に、現実味を帯びた面影が  
無惨に置き去りにされていた

「…ゆり…りやん」

「やうか、ここが…そなんだな」

「…」

足を止めた皆も、異様な閉塞感に支配された中心に立ち、ここに何が眠るのかを気がついたようだった

「なあ、ゆり、あれ」

「…？」

なんだらうと、おもむろに灯が指差した先、横断歩道向こうの信号機

その下端に

「……あ」

不自然に小さな花束が、そつと供えられていた

黄色に点滅する冷たい路上を渡り、それに近づき、しゃがむ

見ると、萎れかけた花の中に一通の手紙が添えられていた

手のひらサイズの灰色の封筒に入った、まるで誰かに向けられたような形だった

「手紙、ですか」

「なんでこんな所にあるですか？」

「開けなよ、ゆり」

唾を飲み、躊躇した末に私は恐る恐るそれに手を伸ばした

中には白い手紙が一枚だけ入れられていた

……嫌な予感がした

手書きの文字に田を通すと、その予感は「じ」と「じ」とく的中した

差出人は、桐島 逸希

そして、ハルへと向けられたものだつた

つまり手紙の内容とは

10月1日、23時に警察署で待つという事だつた

よく見ると、右下のにすでに誰かが触った指の形跡があつた

(ハル……)

花束の経過具合からしても、私達の停学謹慎中にはすでにあつたものだ

着々と、この街は最後の対峙をする準備を整えていく

「……ねえ、皆 お願ひがあるんだけど 」

胸を締め付ける痛みを堪えて、今にも通り過ぎたい弱音を押し殺して、私は抵抗した

今、どうしても確認しておきたい場所があつた

全てを知った上で、最後の夜を迎える上で、逃げずに見ておかなければ

ればいけないと思つたんだ

「ハルの住んでるアパートを、見ておきたいんだ」

そつして、手紙を元に戻し、じめつゝ陰氣に満ちた道を直進した  
一歩進むたびに、足の裏はじんじんとして、埃を吸うよつよつ息苦し  
くなつた

……

‘秋日莊’

表にそつ書かれた、築何十年も経つていそつなアパートの前で五人  
は足を止めた

「いじだね」

外見はどんより黒とも茶色とも似つかない色に侵され、かなりの老  
朽化が進んでいた

「ゆり、本当に大丈夫か？」

「……うん、見るだけだから、それに多分、もうハルはいじにはいな  
い」

本当は、少しだけ後ろめたさに似た恐怖感もあつた

二階建て、全部合わせて部屋は六つだった

一階の部屋のどの部屋にも該当する苗字はなく

赤茶に錆びきつた骨組みの階段に、出来るだけ足音を鳴らさないようにして私達は上つていった

「……」いやないでしょ？ 「

202号室、その名札には、ほつきじと紺野と書かれて立てかけられていた

（…………）ハルと美弦は暮らしてたんだ（

電気はついていない、生活感もない  
ドアノブをひねってみると、しっかりと鍵がかけられていた

中を見なぐれ、人のいる形跡などすっかりなく、ものけの空なのが見て分かった

（ねえハル……貴方は今……どこにいるの？）

主に捨てられたようにひつそりと佇むそこは、今では人が笑つて住んでいたとは思えないほどさびれていた

全てが薄汚れて、家として完全に死んでしまっていたのだ

ハルはここで、一年もの間、家族のいなくなつた暗い部屋で想いも吐き出せず、毎晩壊れた涙を滲ませて泣いていたはずだ

帰る家がこんなに成り果てて、どれほど辛く、そして痛々しい時間だったか

最後には苦肉にも、ウイッチとして、少年はこの部屋から刃物を持って駅へ行ったのだ

その瞬間、こんな朽ちたハルの深いカルマを目の当たりにして本当に一夜なんかで助けられるのか、不安が募ってしまった

実はもうずっと前から手遅れなんじゃないだろ？

私達がしようとしている事は、所詮は学校の道徳で習ったようなセオリー的幻想的解決法で

今更そんなものが、居場所も分からぬハルに届くのだろうか？

「…………」

脆そうな扉の前、ポケットに忍ばせていた携帯を開いて美弦のアドレスを見つめる

「…ねえ灯、私達の存在ってなんなんだ？」「これからやろ？」「てる事は、ちゃんとこの人に届くのかな？」

不意に出た消え入るような声は、悲しみに沈んで扉にぶつかる  
私は後ろに立つ灯に顔を向けずに聞いた

問われた灯は一度大きく息を吸い、私にためらう隙も与えず響かせた  
「あたし達がしようとしている方法が正解なのか間違いなのか、そんな事は結果が出るまで誰にも分からないし」

「あたしらの存在は所詮、大きなお世話の邪魔者で、ひどくリスクがある無茶で自虐的な行為をしてるに過ぎないのかもしれない」

灯はどこか冷ややかに、そして客観的に聞こえた

「 でもね 」

その時、灯が声質を強くして逆らつように切り返した

「 ただ唯一、このずっと続くどうしようもない街のカルマを変える事が出来る、縁を持つてゐるトすれば、それは間違いなくゆりお前だけなんだぞ 」

「 ッ！ 」

真っ直ぐな視線をかざして、灯は大氣を揺らした

「 人を助けようと決意したときに、手遅れなんて、正解も不正解もないんさよ？、あたし達がずっと今までそうだつたじやん 」

「 …うん 」

「 大事なのは、がむしゃらでもなんでも、最後には助けたいってかざし続けることだろ？ あの花火みたいにさ 」

「 …うん、そうだね、そうだつたね 」

「 だつたら、明後日やるしかないだろ？ 明後日、叫ぶしかないだろ？ 」

嬉しかつた、曇りかけた心が自信で湧いた

「 ふふつ、ゆりちゃん、忘れたんですか？ 私達は、sellin

go day, ですよ? 「

「にやう、このままじゃ消化不良で終われないのです、この街を全力で巻き込んで、もう一度救いに行くのです そしてライブに行くのです」

「一度負けた…ボク達なら、いつでも君の為に死ねる覚悟は出来てるよ」

彼女達の声はいつにも増して搖るぎなく、私の胸に訴えかけた

「ありがとう 皆」

褪せる事を知らない戦友の強い瞳に支えられ、私はハルの住んでいたアパートを後にした

直面した大きすぎる傷痕に生じた一瞬の不安など、尚も大志を抱き続ける仲間の声によつて綺麗に吹き消された

あの花火大会の日

散り散りの絶望のふちで私は変われた、誰一人として諦めずに変われた

でもハルだけは…例外でね、残念ですが変わらないんです

そんなふざけた定理があるもんか

弟の死も自殺もウィッシュだつて、一年前に閉ざされた世界だつて、人生終わりきつたどん底の位置にいたつて

絶対変われるんだ！！

海が枯れないといけない、空を飛ばないといけない

もしそんな状況になるうとも、例え何万光年離れた場所にいようとも  
私達はどんな手段を探しても貴方を救いに行くだろう

私は明後日、貴方を助ける為に、この皆とあらゆる全てをかけてこの  
街でもう一度戦う

一人の男の子が死んだ道路の上に踏みどまり、限りなく広がる空  
を突き抜けるほどストレートに視界に捉えて

今にもこぼれ落ちそうな星達に野望をたっぷり染み込ませて

風の先に立ち、私は強く強く決意した

\* \* \*

- 田だまり喫茶店 -

いのは坂を上り、若い草の茂る暗闇のトンネルを抜ける

帰つてくると、私達の隠れ家の店先に何かがなびいているのが見えた

眉をひそめて近づいていくと

「なんだ…これ」

「、ガリレオ衛星、？？」

ほっこりする揚げ物の余熱の香りを打ち消して  
木目扉に、夢を覚ますように一枚の紙がバチンと貼り付けられていた

新たな第三勢力が、そこには待ち構えていた

（…なんだよ、なんなんだよ今度は ）

重大な隠し事が親に見つかったときのような、冷や汗と緊張で言葉  
を失う

威嚇するようにサインペンの太文字で書かれたそれに田をやると  
もう後戻りなど出来ない自分達の立場が浮き彫りになつた

『君たちが当日何をしようとしているのかは分からないが、私達は  
君たちが準備している全てを知っている  
君たちが今からしようとしている事は無駄な努力だ、自滅行為だ  
万に一つとして成功する可能性はない』

（なに…これ ）

『せつかく手に入れた日常を棒に振らないほうがいい

今ならまだ間に合つ、何も失わずに家族にも迷惑をかけずに引き返  
せる

‘もうやめなさい、

私達に君たちを捕まえる事は出来ないが、これは我々大人からの警告だ。

ガリレオ衛星

』

(……警告 )

私達の企てた行動は全部見つかっていた

追いかける強大な影が、たった五人の私達の前に最後の選択というエサを持つて立ちはだかる

後悔に迷わす言葉を巧みに並べて、分岐点へ立たせて苦しめる

「みどり団が…見つかっているところですね きっとコーディーの中にもスパイが」

ひよりが顔を曇らせて指を口に当てるて考え込む仕草を見せる

「誰なのですが ガリレオ衛星って」

怯えるように顔を強ばらせて、有珠に言った

「ガリレオ衛星、つまりはガリレオ・ガリレイが見つけた木星の近くを回る、四つ、の衛星の天体的名称ですね」

「四つて事は、いや、そうじゃなくともこんな事が出来るのは、桐島逸希達を含む加害者の四人だろうな」

「どうするの灯?、みどり団も見つかって、ここにいる事だつて筒抜けで」

「 だから？」

（え……）

動じることなく、灯は得意気に笑つてみせた

「……だから、これからやることは全部見破られてるかも知れないんだよ？」

私がそう言つと

その瞬間、灯は貼り付けられた紙をとつさにぐしゃりと掴み

そして、反抗心に身を任せて一気に派手な音を撒き散らして破りさつてみせた

「お前らに敷かれたレールなんかへし折つてやるよッ！」

「 ッ！」

灯は侵食された領土に立ち、なりふり構わず明日へ向いて腹の底から声を張り上げて叫んでみせた

「 じつにだつて譲れないモノがあるんだッ、人生かけちまつほど死にかけてる男の子が目の前にいんだッ

いいさよ、別に今さら隠さない、知恵くらべだ！、じつちが明日を変えるか最前線で真っ向勝負してやるッ

そして、seiling day（みどり団）、ウイッチ、ガリレ

全てのリスクかけた新たな挑戦の門出に立ち、開け放たれた星空の下  
断固として警告の一文字を逆らつて私達は一日を終えた

明日は、ついに最後の準備期間だ

それぞれの信念と正義を武器に、個々に求める結末を掴む為に

矛盾を抱えたまま、最後の三日戦いがすぐそこへ迫っていた

## 第15話

- 同時刻 - 聖蹟桜ヶ丘某所 -

あの日から、私達の時計の針は進んでなどいない

夜のコンビニに行く事もためらわずにいられない、一秒が重く粘り  
それまでの原型を留めず…私の日常は寂しさに滲んだ

忘れ物をしている感覚は拭えず、抜け殻のようなスカスカな空白感  
も消えず

あの日以来、朝へとまともに繋がらない生活が続く

けれども人の脳といつもの、それすらも一年続くと順応しようと  
徐々に慣れ始める

私の名前は 中島 京と言つ、三十になる男、独身

そして、人殺しの親友を持つ共犯者だ

日没を過ぎ、ブラックコーヒーとタバコを相棒に、誰もいない社内  
で残業のデスクワークに勤しむ

昼間とは一変したビル内一角に佇むそこは、現在蛍光灯は私の頭上  
以外はほとんどが消されている

しんみりと侘しきさえ感じられる冷たい空間だが、私にはこの孤独感が居心地良くも感じられる

何かをしているといい、それだけで気が紛れる

書類の山を処理して、深い息を吐いてネクタイを緩める  
眼鏡を外し、充血した耳頭を指でぐつと押し、すっかり固まつた背骨を鳴らして立ち上がる

（みどり団…か ）

昨日、久しぶりに三人で屋上で集まつた後、仕事の合間を縫つて私はみどり団について調べた

高校生に成りすまして登録をした、言つところのスパイという行為を行つたわけだが  
パソコンから一通のメールを送ると、案の定、何の疑いも持たないリーダーと名乗る、みどり、という者から正午過ぎに返信が届いたのだった

康介の言つ通り、その内容は十月一日に集まれないか、という安易で単純なものだった

私達が疾うに失つた、疑いなど持たない真つ直ぐな言葉達

失敗など恐れない、それすら考える事も忘れる、空だつて飛べる若さの勢いで満ち溢れていた

「…ふう 」

力チリカチリと、クリックの音が薄明かりに響く  
視線を上下にサイト内を散策してみると、一物の不安は現実味を帯  
びた形となつていった

（やはり、君達なのか ）

全く、康介の警戒した通りだ

変化を求める高校生の集まりの中、出来すぎなくらいにシナリオの  
つじつまが合つてしまつ

しかし何度も破れれば気が済むというのだ、こんな夢のような子供だ  
ましの策なのだぞ？

こんなものに全てを賭けて、この街を本気で救えるとでも思つてい  
るのだろうか？

君達を、一体何がそこまで突き動かしているのだ

（それでも、真剣に茶茶を入れる気でいるというのなら、我々とし  
てもやむを得ない ）

不在の逸希に言う事は出来ない

それどころも、あいつにこれ以上の余計な負担はかけられない

申し訳ないが、私達三人にも譲れない都合がある、君達の迷惑を阻  
止させてもらつ

（君達の為だ、動いた事に今に後悔する、端から泥沼に墮したこの  
街を救える可能性など、方法など最初からないのだから…… ）

パソコンの電源を切り、帰り支度を整えて私は退社した

向かう場所は一つだつた

彼女達がいるとするならば、恐らくはあそこだらう

……

以前、目的をほのめかさず、フラットに日向が逸希からその場所を尋ねていた

‘日だまり喫茶店’

駅の先にある、いろは坂の上、黒々とした闇の中にその場所は隠されるようにポツリと存在していた

まさに隠れ家にはふさわしい場所のようだつた

そして、ガリレオ衛星の名を名乗り、私は警告の一文字を若者に突きつけた

‘ガリレオ衛星’

十五年前になる、夏夜の屋上で、初めて四人で掲げた天体望遠鏡で見た天体の名前だつた

瞳の奥に直接染み込むほどの感動だつた

望遠鏡を担いで駆け上つた階段、金網を潜り抜けて見上げた夜空、夏の夜の香り、手を伸ばして掴みたいと夢中になつて見入つた星

今も鮮明に覚えている、私の人生の中で一番楽しく、生き生きと毎

日を充実していた時期があそこだつた

（もつ…無邪氣なあの頃には戻れないんだな ）

そしてため息交じりに、眉に渋い縦ジワを寄せて、私はその喫茶店の扉に張りつけた

まるで差し押さえの張り紙でも付けられたような無惨な見てくれだつた

敵に憎いような感情は一つもなかつた

逸希と似たように、巻き込んでしまつた事に対する申し訳なさや後ろめたい自己嫌悪の気持ちでいっぱいだつた

まだ幼い高校生の彼女達には、やはり普通の日常に戻つてほしかつた

結局は自分のせいだ、逃げ続けてきた業だから、素直にもつこれ以上犠牲者を出したくなかったのだ

（だがこれで、少しば自分達の置かれた立場が分かるだろ？ ）

君達は戻るんだ

でも、本当に、彼女達がこの程度で諦めるだらうか？

全てを終える短期決戦の夜は、もうすぐそこで摺り足を鳴らして待機していた

（……帰るか ）

濃い草の香り、久しぶりに見上げた夜空は瑞々しく澄んでいて  
心地よい夜風が青春を捧げたその古き空へ視界をいざなつた  
毎日、今は彼女達が主役になつてこの空の恩の下で夢を握りしめて  
活躍していると思うと

少しだけ、胸の隅っこ辺りがジンとした氣になつた

次、またこの空が見れるときが来るならば

私は……、私達は……、ガリレオ衛星は……

……どこにあるのだろ？

意味もなく手を伸ばして、無音の星明かりが降り注ぐ帰路を、背広  
を着た三十の大人は去つていった

## 第16話

・9月30日・(火)・3日目

聖蹟桜ヶ丘女子高校

放課後、赤みを帯びた西明かりが、賑やかな生徒達の横顔を遠く染め上げる

六限目の数学の抜き打ちテストの疲労に唸りながら、灯と肩を並べて廊下を歩いてゆく

乾いた街は、少しずつ色調を変えて夜を迎えるとしている

*selling day*が再結成してから早二日、ついにタイムリミットの最終準備期間だ

思つ存分溜め込んだアイディアと能力を武器を手に唯一の、縁、を結ぶ為、私達は大作戦に必要な道具を揃えに駅前へ繰り出す約束をしていた

調達、細工、仕込み、下調べ、偵察

失敗の許されない解放劇を起こす為、私達は危険な戦場へ赴く「にしてもクラス違うと…」ついで「時めんどくせよーな」

放課後すぐの校舎というのは意味もなく動きが多い学業からの一時の解放に、私でさえ茜色の傾く校舎の中で羽を伸ばしたくなる

廊下にはそんな生徒で溢れている

友達と話しながら掃除をする生徒、カバンを持つて生徒玄関や部活へ向かう生徒

はたまた帰りの予定に花を咲かせる生徒なんかでぎりた返している

「教室に行けば済む話でしょう」

そして私達は、まさにそのどれにもカテゴリーされていない反社会的ジャンルに属する

だらだらと進み、先にひよりのいる教室に向かつ

掃除中だつたひよりを外から茶化して回収し、校舎を反対側に歩いていく

有珠と奏のクラスはまだホームルームが終わっておらず、中から先生の声がしていた

三人で廊下側の壁に背を当てて待つ

しばらくして中からイスの引く音が一斉に響き

「お待たせしましたのですー」

カバンを手に、続々と出てくる生徒の間から有珠と奏が小走りになつてトテトテ寄つてくる

全メンバーが揃い、いざ、よつやく下校

そう思つた矢先だった

ふと、やつれ今まで中にいた先生が、なぜか私達に歩み寄つてきたの  
だった

「あー、お前ら ちよつと待て」

無黙に細長い顔と長身からゴボウに似て、あだ名が何とも単純にゴ  
ボさんと呼ばれる、小田という先生だった

「えつと、なんですか？」

生徒からは親しみのあるお父さん的な先生だったから、私はつい油  
断していた

すでに私達は、一度のペナルティを食らつていた事を……

「あー、お前ら、また性懲りもなく裏でしゃしゃつてないだろ  
うな？」

「や、やつてないに決まつてるでないかいつー。こんなにいい子に  
育つた生徒達を疑つとはつ、ゴボさん見損なつたさーー。」

その瞬間、コツコツと灯の頭にチョップが振り下される

「馬鹿、すでにお前らは前科あるだろつが どうかお前はまづ髪  
の色だ」

〔冗談半分に言つ〕、「ゴボさんは続けた

正直、私はズキリとした、今まで経験上、本能的に何かの罰が来る  
のを悟つた

「いやなあ、あれだ、なんといつか昨日、学校のパソコンに変なメールがきたんだよ」

だから渋々と、どばかりに「ボウに似た頭を搔く

「メール…でしょつか？」

「お前らがまた裏で何か問題を起こすような事をしている、なんと いうか密告みたいな内容だつたんだよな」

（…つ…）

頭に電流が走る

…やられた

先手を打つてそんなことが出来る者がいるとするならば

「確か送り主は、あーと…うん、あれだ、ガリレオ衛星、とか言つ のだつたぞ？ お前ら心当たりはあるか？」

「ツ！ な、ないですツ」

その刹那、頭に巡った言葉と「ボウさん」の声がリンクし、思わず反射的に不自然な声を張り上げてしまつ

気がつけば、私はまるでむきになつて自分が嘘をついていないと言わんばかりの反応をとつてしまつていた

「？なんか怪しいなあ？ まあこんなでも一応俺も教師だからなあ、

一回形だけ取らなきゃいかん、今から職員室に来い　お前らへのメ  
ールだしな　」

……まあつい

ここで捕まるわけにはいかない

捕まれば、……死ぬ

刻々と逃げ道が塞がれていく時間の中で、立ち廻りし私達は考える  
平静を装いながら、息を殺してどこか手探りで逃げる術を考える

探し

逃げ道を探すんだ！

そしてコンマ数秒、緊張したピンチを真っ先に救つたのは、有珠だ  
った

「先生つ！」

ビシッと手をあげて、無駄に大きなモーションをとった

「つむ？なんだいきなり？」

歩き出でたとしていたゴボさんが驚いた様子で振り返る

（有珠？どうする気？　）

一定のための後、有珠は能力を解放した

「実は…有珠達、これからビーチしても行かないといけない所があるのです」

…「クリッ

「うん？ 行かないといけない所ってなんだ？」

息を呑み、神に祈るような思いで周りのメンバーも有珠の打ち出した助け船に意識を集中する

「、中央病院に、これからお見舞いに行かないといけないのです…待つていてる友達がいるのです」

その瞬間、今までの寸足らずな少女は消え

それはそれは相手の同情を誘う悲劇的声質に変わる

「なんだどうした？ 知り合いが事故でも遭ったのか？」

「…ぐすんっ、実は…クリ…ッ」

思い出しただけでも悲しみの涙が溢れてしまつ、もちろん嘘だ

周囲は完全に有珠のペースに引き込まれる

瞳はうつすら腫れて、今にも端から滴り落ちそうな涙をじわりと溜めている

すべて、嘘だ

「…行くつて、有珠約束したの…ッ」

「も、申し訳ありません、面会時間が今から行くとギリギリになつ

てしまつんですね

すかさずひよりも波長を合させて加勢する

「お…おお、悪い、そいつは行つてやるべきだ」

不意を突く幼い泣き顔に、なんともぬい返事が帰つてくる

周囲を通過する生徒達の白い皿を浴びながら  
たまらず「コボさんは小さな肩に手を添えて慰めた

思いいつきつ困惑した顔だ

水面下の駆け引きが続き、そして

「うーん、まあいいか、それに比べたらこりんなのは大事なことじや  
ない うん、そうだ」

「…すみません…」

内容だけではベタ過ぎるそれさえも  
有珠のスイミーを駆使すれば、疑ひ隙さえ『えず、まんまと人のい  
い返事へ誘導させる事が出来た

「ボさんは有珠の無垢な性格から、まさか嘘をついてくるといふ考  
えも思いつかないといった感じだった

難を逃れ、私達は失礼しますと一礼をしてそそくかとその場を去つた  
途端に緊張の糸が切れ、ふうと階段へ逃げ込もうとした

そのとき

「あー、お前、ひー。」

(…ビクッ！)

不意に足が静止する、遠くから「ゴボさんの追及の声がつんざいた

(ウソ、まさか有珠の演技がバレたの…？)

ダメなのか、なんでこんなところで…

その声に背が跳ね、一回引いた緊迫感が首を立てて蘇る

周囲の温度がガクンと下がり、途端にメンバーの顔がぶり返して青ざめしていく

自分でさえ顔が強張つていくのがわかつた

そして、「ゴボさんはゆっくりと迫り、言つた

「あれだ、お見舞いに行くなら確か駅前のスタバの近くにある小さな花屋がオススメだぞ」

「…は??」

思わず、身構えていた全員が揃つてきょとんとアホ面を浮かべる

予想していた言葉はなく、なんとも氣の抜けた言葉だけが返つてきたのだった

三秒後、なんだよと全員の肩から力が抜け、安堵の息を漏らした

そして、今度こそ階段を下つて、危機一髪私達はその場から脱出したのだった

「いやーっ ヒヤヒヤしたさよ、ゴボさんがお人好しで良かつたの  
らー、にしても有珠の演技はホント神がかってんな おかげで助か  
つたぜ 」

「……猫かぶり…」

「久しづりに本当に私ももうだめかと思つてしましました」

「エへへ、有珠は嘘だけは上手ですからー」

有珠は嬉しそうに笑い、薄影の伸びる生徒玄関でローファーに履き替える

（それにしても…）

全てを裏返そと企む正義は、本当に私達のすぐ側まで迫つてゐる

徐々に、けれども確実に自分たちの身の回りを蝕んでくる

（家は、大丈夫かなあ）

校舎から離れ、グラウンドから真つ直ぐ正門を抜ける  
五人は現在地に立ち、改めてそつと校舎に振り返つた

陽が傾き、辺りがしんと静かになる

馴染み深い学校を見つめて、灯は言つた

「まあ、残念なほど…もつこれで明日学校には行けないな

「そうですね、部室ビリーカ学校にも行くことが出来なくなつてしましましたね」

「…………代償…」

「また、最下位になつちやつたのです…」

目の前に佇む四階建ての校舎の大きさと比例して、私達がどれだけ脆くて小さな存在かを思い知る

此処で、本当に色々な経験をした

青くて近い夏空の下、全てが始まった出発点

皆と出合つて、汗まみれに廊下を走り回つて、水道でがぶ飲みして夏夜の屋上に侵入してみたり、段ボールを運び出して部活を作つたり、非常階段で風に当たつたり

一時はぶつかって傷つけ合つたりもした

秘密を打ち明けて、幾度と無くここから先に進んできた

いつもの恩や思い出のヒンズードが詰まつた大事な聖地

…でもそれは、もう無い

私達は、この瞬間をもって

完全に日常へ帰る帰路を……失った

大きすぎる犠牲に、ぽつかりと沈黙が仲間達に流れる

嫌な空虚感が加速し足元を覆いつ

それに耐えきれず、払拭するように、らしくもなく私は目一杯強く  
呟いた

「、勝てばいい、」

大口に氣取つて、眼を見開き、一端に秋空に掲げた

「ゆつ……ちやん？」

「明日絶対に勝とう、このまま終わるになんて出来ないよ

うんと背伸びをして、私は搖るがなく言こわした

皆は戸惑い、そしてゆつくりと瞬きをして、吹つ切れたように単純  
な笑みをこぼした

「フツ、ゆつと主人公らしくなつてきたな そうだな、勝てばいい  
んだ」

呆れるよつこ一やけた口元で、衝動が空を飛び越える

「ふふ、相変わらず変わりませんね私達は、何も変わりません 今

も勝利を目指して進んでいます

「…………世界はボク達を中心回ってる…」

「こやう、見事勝ち誇って、そして帰つてくるのですつ、もつ一度、五人でこいく、」

灯、ひより、奏、有珠、ゆり

そして、私達はまた歩み始める

「わあ、行こひざつ、世界を変える前夜祭だ、」

踏ん切りをつけ、五人の傷持ち少女は前を向いた

ほんの少しだけ心残りを滲ませて、五人は聖蹟桜ヶ丘女子高校に胸を張つて別れを告げた

ここが私達の望んだ戦線だ

だつてさ、知つてる?

マイナスにだつてさ、縦一本増やしたらこんなに簡単にプラスにだつてなるもんだ

そう考えたら案外単純にワクワクしないかい?

だからね 今、あえて私達は絶望と手を繋いでこいつおつと思つんだ

ପରିବାର, ପଦାର୍ଥ

କାନ୍ଦିର, ପାନ୍ଦିର

歪んだ正義が飛び交う裏世界を、灯と私は託された

最終決戦を明日に控えた夕暮れ

大きな緊迫感と使命感を背負い、私達は手始めに灯の家からパンク修理を終えた自転車を引っ張り出してきた

壊れるまで乗りつぶした、あの懐かしいママチャリだ

いつもの一人乗りで、いつもの並木道のトンネルを走り抜ける  
灯は前傾姿勢を保つたまま、ヒビ入りのペダルをフル回転にかぎして通行人を追い越していく

向かうは最後の戦場だ

身構えた肌に、初夏にも似た快適なスピードが涼しい風を当てる

久しぶりの活躍にか、待つてましたとばかりに自転車も荷台に乗つたお尻に振動を伝えた

そして十メートル先、五メートル、二、一、

颯爽とゲートを潜り、炭色にそびえ立つ支配者達の城がその顔を出す

見渡す限り只の駅前、一見広くて平和で、学校終わりの生徒がたむろする慣れ親しい場所

そしてそこは、『ぐ一』部の人間を巻き込んだ、どす黒い秘密を持つこの街の抗争地帯

花火大会の日、私達が必死になつて走り回つた凱旋の舞台が、数奇にも最後の舞台だ

スクランブル交差点に飛び出し眺めれば、街はすっかり学校終わりの制服達が社会人に混じつて群れていた

ネクタイは緩み、ワイシャツは裾は飛び出し、ちゃつかり家路を抜け出した高校生達が楽しげに顔をオレンジに染めている

そして、ふと考える

果たしてこの中で、明日、街で戦争が起つるとは一体誰が予想しているのだろう？

と同時に、リア充はびこる溢れんばかりのエネルギーの中、ポツリポツリと携帯をいじる姿を見かけると

ああ、この群れの中にもみどり団の落ちこぼれや省かれ者のメンバ一達が独りぼっちでいるのかもしれない

冴えない表情で息を潜め、しかしネット内の水面下ではとんでもない変化を待つ弱者達

なんて、そんな勢力を想像して、密かに沸々と心が高鳴つた

今日も変わらず京王線の電車は新宿からサラリーマンを乗せて帰つてくる

何ら変わらない、いつものお疲れモードの茜色に染まつた聖蹟桜ヶ丘駅だ

そんな一角に一人はウイルスの如く忍び、駅の改札口へ続く長いエスカレーターを上つていく

意味もなく振り向くと、首筋につつすら夕焼け色をした風がかすめ同じようにして、前に立つ栗色の髪がふわりと後ろを向いた

「うにー、結構買い足すものあんなー」

そう言う彼女の手には一冊のノートが握られている

翌日に控えても、未だにメンバーは作戦内容をおおぞりぱにしか聞かされていない

だからもちりん道具も知らない

けれどもそれはずっと前からの事で、灯らしい癖だ

最後に全員の気持ちを爆発的に団結させる、煽つて引き締めさせる、

これはそのシチュウを作る手段みたいなものだ

灯の作戦を信じているからこそ私達は完全に身を委ねられる、だから何も口出してもしない

そして現在、学校を後にした私達は一手に分かれていた

駅前で調達をする組、つまりは私と灯

喫茶店本部で作業をする組、つまりはひよと有珠と奏

ひよりはウイザードを一から作り直し、有珠はまた新しいみどり団のコーナーからのメールを返信する作業

奏は制服フェチの知恵を生かし、灯から言われた特殊な道具達を翌日配達が可能なネットショッピングから発注する仕事を担っていた

更に奏にはもう一つ、灯から街の隅々を知る能力に頼み事をされた  
いた

それにはなぜか、私の、携帯、を貸してほしいと要求された

意味なんて分からなかつた、理由も聞かなかつた

それでも私は信頼した、私は奏を、灯を信じて、現代っ子の命の次に大切なそのアイテムを勝つ為に預けたのだった

そうして、まさに全員が身を挺して一丸となり  
負ければ退学の十字架を背負い、たつた一つつきりの秀でた一芸を  
駆使して計画を紡ぎ合わせていた

.....

「ねえ、どこに行くの？」

「うーん、色々と寄るとこはあるけど、まずはあそこかぬあー  
「あそこって？？」

首を傾げて尋ねると、灯はどこか一ヤリともつたいぶつて言った

「こしそつ、映画館にー、ディズニーストアにー、あ、灯様銀だこ  
食いたいなー」

「こやこや、ビルに行く気なの?、とこいつがいればトークつかう

「ふげシリー」

おでこをパチンと軽く叩くと、灯は驚いて目を閉じた

「うう…灯さんの[冗談]さよ」

「それで、今からどこに行くの?」

すると灯はまたも得意げに時間をもて余して  
私の好奇心をギリギリまでくすぐるふりせたりして

「、楽器屋ー、」

とびっきり嬉しそうに、意外な言葉を放つた

「楽器屋?なんで?」

「勝利の鍵を握る、最終兵器、を手に入れる為だよ」

「??」

やけにカッコつけて、灯は指の関節をポキポキと鳴らした

そつして、今では懐かしい、私とハルが初めて出会ったエスカレーターを大きな歩幅で越える

灯を先頭に、趣向も知らざれぬまま、イベント前田の買い出しにも似た気持ちで駅構内の楽器屋を田指した

「えっと、五階だね」

階段脇に取り付けられたプラスチック製のフロア案内板を指差す  
丁度帰宅時間のピーク、大きな駅ビルの中はさながらクリスマス並  
みの人の活気で賑わっていた

そんな人ごみも今日ばかりは気分は悪くなくて

ふと見ると、桜ヶ丘男子校の制服を着た二人組がギターとベースの  
ケースを背負つてじゅれ合っていた

向かう目的地はきっと私達と同じ場所で、その歩みには何か真っ直  
ぐなオーラに満ちていた

それに釣られてか、明るすぎる店内の白色の蛍光も起爆剤となり、  
自然と靴下に収まつた私の両足もウズウズした

（エスカレーターはどこだらう？）

フロアマップを見返そう

と思った矢先

「待ちきれねー！ ゆりーつ、どつちが早いか競争だじぇー！  
「ちよちよつと灯待つてつ、え、ていつか階段から行くのッ！？」

目をくしゃつとさせて、有り余るハイテンションでパタパタと先走  
り、灯は階段を駆け上り始めていた

私の静止など意味もなく、結果として最後まで私も汗だくで五階ま

で走りきり

「だあ……はあ、はあ 死ぬ…っ」

「だ、だから最初からエレベーターで行けば良かつたのに」

気がつけば、一人して膝に両手をつけて無駄な疲労感に息を荒くへばつていた

「…もう、なんで階段でなんて言つたんやよー」

（えー…… 私 一言も言つてない ）

終始そんな灯のペースに振り回されながら、私達は思わず顔を見合つて頬を緩ませた

学生らしい事とか全部放り出して、ただ一人で走った、その単純すぎる感じがひさすらに気持ちよかつた

それは恥ずかしさもあり、じたばゆい嬉しさもあり、不思議と懐かしい気持ちをかよわせた

そして終わつてみれば、これは灯なりのさりげない優しさだったのかもしれないと、そうも思つた

表面には見せない学校を失つた私の不安をすくい、額に汗まで浮かべて、間接的に埋めようと努めてくれていたのかもしれない

なんとなく、普段からの灯の姿勢もあってそんな事を思つた

そして、私達は勝算を握る楽器屋の前にたどり着いた

\*\*\*

見渡すと、ワンフロアを贅沢に使つた店内は田代りしてしまつ輝きを放つていた

綺麗に壁に立てかけられた新品のギターはどれも曇りなく光を反射し、色とつどりの形を揃えている

種類ごとに細かく仕切られた棚には、アーティスト使用と書かれたピックからお手頃チューナー、何から何までお客様を喜ばす色を蓄えていた

「おー やつぱし！」に来ると興奮する

見ると、先程見た制服二人組がスコアの並んだ棚から楽譜を手にしていた

つい、口元が緩んだ

「私は楽器やらないけど、なんだかここは好きかも」

皆が生き生きしている雰囲気が空間から滲み出でている気がする

奥に設備されたの防音スタジオから響くバンドの生演奏や、店員さんがお客様相手にアンプを通じて鳴らすギターの電子音、大きく立派なドラムセットもだ

指先で触れただけでドキドキしそうで初めて味わうたさんの世界が小さな高校生の胸を一杯に覆いつくした

なんだか、それだけで本当に明日を変える気分になった

そうして、ついに本題に取りかかる

「「」の中で何が必要なんだっけ？」

「えっと、有珠から頼まれたのは「」と言つて、灯はノートのページをペラペラめぐる

しばらくした後

「おっ、これかな？」

壁際の棚に行き、タバコサイズ程の小さな箱形がびっしり並んだ中から一つを指差した

「アコースティック・シュミレーター？？」

レトロ感の漂う、一見おもちゃにも見える可愛い機械だった

アンプから流れるギターのサウンドを変える、エフェクター、というもの

「つか金足つるかなあ

「皆からあんなに貰つてきたのに？」

すると、灯は全員から預かつた貯金と手持ち分が入った茶封筒を力バンから出した

つい先程、学校前のコンビニの事メンバー全員、ATMの前でおしゃらまんじゅうになつて画面を操作した

お年玉やお小遣いを貯めた貯金、それら全てをたつた明日一日分だけの為に全額はたいただ

茶封筒の中には高校生四人が託した重い重いお札の束が詰まつている

「大事に預かつたんだ、無駄にはしない、でもぶっちゃけ、周辺機器は高いんさよ」

そして、エフェクターをまず確保して次に進む

「次はこいつさね」

目の前には、多種多様なボーカルマイクが陳列されている

その中から灯が手に取つたのは

「へえ、そんなマイクもあるんだ」

超小型軽量とポップが付けられた、白色の、ヘッドバンドマイクロホン、

前に立てかける一般的なマイクとは違い、よくオペレーター やジャーナズのライブで付けていいるようなやつだった

細い棒状の本体を両耳にかけて固定し、小さなマイクの先端が丁度

□元にくる形をしている

コンパクトで激しい動きにも対応できそうだ

「うわ、てか 高っ！」

そして値段も大変高価に仕上がっていた

他にも、そのすぐ近くのオーディオ小型ミニキサーも一緒に購入した  
CD程の平べったい大きさ、銀色のフレームにつまみが四つ付いて  
いる

灯に聞いたところ、普通はギターアンプとマイク専用のボーカルア  
ンプを使うのだけれど

これはその両方を調節して一つのアンプから出す事を可能にする大  
変便利な装置らしい

ギターとアンプだけあればバンドが出来ると思つていた私には、そ  
れは全く複雑で未知のもので、ただただ感心してしまった

「それにしても本当に色々な物があるんだね」

「ギターはそれだけ奥が深いんさよ」

ふむふむと頷いていると、次なるアイテムがやつてきた

「今度はなに？」

「じゃんつ、USBインターフォースです」

「いんたーふえーす??」

「うーむ、説明が面倒さけど、簡単に言つとアレかな、パソコンを  
使ってアンプをスピーカーの役割として音楽を流したいときに使う  
もんさね まあ他にも使えるけど」

「それは普通に繋げられないものなの？」

私はひよりほどパソコンにも、灯ほどギターにも詳しくない人間なので、ついケーブル一本と根性でなんとかなると思えてします  
でも現実は、そつ単純ではないらしい

「えつとな、パソコンに付いてる差し込み口のUSB端子と、ギターに使うアンプのLINE端子がまず全然別物だから、それを繋ぐ役割を持っているのが、このUSBインターフェースなんさよ ゆり君お分かり？」

「なんとなくで分かりました」

「ぐりりと、少し砕けた表情で頷いた

選んだ品々を一回レジで会計を済ませる  
高校生が然も当然と出した一万円札束に、店員も驚いた様子だった

会計を済ませる間

なんだか今買ったモノ一つ一つ、果たして二十数時間後にはどんな魔力を宿して活躍しているのか

最後を飾る隨一の武器の分だけ、想像しただけでもグッと込めた拳  
に指先が熱色に染まつた

そして最後に、灯はこの戦いで一番大事な機材を探しに夜を進めた

「先日は、ジモー」

お店のエプロンを着用したアルバイトらしき店員さんを見つけて、灯はすかさず声をかけた

一言一言話し、バイトさんがスコアブックを棚に補充し終わるのを待ち、そのままアンプのコーナーへ足を運ばせていく

「…灯、知り合い？」

初対面ではないらしい反応に耳元で小声で聞くと

「おう、先週助けていただいた紳士さんさよー」

わざわざ小声で聞いた問いに、灯はなんとも灯らしく大きな声で答えた

そういうしているうちにアンプのコーナーに着く

そこは店内の四分の一ほど、かなりのスペースを使っていた

見渡す限り、ところ狭しとライブで使うような巨大なアンプ、小さなミニアンプが積まれて身を寄せあっている

「持ち運び可能なエレキアンプで、アコギにも対応してる、迫力のある大きな音が出るアンプだとどれがいいですかー？」

「そうですね、そうなりますと…こちらにあるのなら大体は対応していると思いますよ。後はお客様の希望する音量とパワー次第で

すかね 「

そう言つと、大学生くらいの店員は丁寧に話しながらこいつかのアンプをひょいと引っ張り出してみせた

適当にギターを持ってきて、近くのパイプ椅子に腰かけるすると、こなれた手つきで先程出したアンプをギターとケーブルで繋ぎ、ボリュームダイヤルを回した

次の瞬間、ジャッジャー！と大きく歪んだ力強い電子色が鼓膜を震わせた

予想していたよりもずっと大きな生の迫力に、思わずビクリと背筋が跳ねる

「うーん サイズはこれくらいがベストなんんですけどねー、ボリュームが足りないかもっす 」

と言つて、一般的電子レンジ、またはブラウン管テレビサイズの黒いアンプに灯は却下の意向を示した

（あんなに大きかったのに、この音じゃだめなんだ ）

素人の私からすれば十分すぎるくらいな轟音だったのに、灯にしてみればしつかりこなかつたらしい

次、また次と、三十分ほど大小様々なアンプ達が鳴らした末に、指揮官は却下と保留を溜め込んだ

これぞとこりものに出会えないまま、ついに店員さんが該当する全

てのアンプを鳴らし終えたのだ

それでも灯は唸り、どうもしつくつくるのがないといった様子だった

「ねえ、それは？」

それに見かねて、何気なく私が指差した物

悩むリーダーの足元近くに偶然目に入った、置物みたいなアンプだった

値札には、マジックペンで書かれた割引価格を斜線で大きく消した跡があつて

まさかのそれでも売れなかつたのか、また更にその下に半額以下にされた見切り価格がでかでかと書かれていた

（うわ、汚…）

ズリッと引きずり出してよく見れば、それは欠陥品なのか、光を浴びた黒色の四角いボディは想像を裏切る灰色の薄埃を被つていて

……ひょっと後悔した

「お客様、ですか…」

「あ、えつと…？」

指差すそれに目を逸らして誤魔化すと、店員さんは困った顔でクセのある代物だとぼやいた

「正直、店側から言つのもアレなんですが、オススメは出来ません

ね  
」

最初に鳴らしたブラウン管テレビサイズ  
形だけなら、始めに灯の出した条件

・運び可能の手頃なサイズ

といふのだけはばつちりクリアしていた

しかし店員さんの説明では、抜群の爆音と破壊力を兼ね備えた一方  
柔らかく柔軟な音が苦手なため、周りの楽器を焼き呑してしま  
う  
単体の弾き語りでもなればとも使えないと、そう説明された

見た目の予想通り、まさにアンプの中ではいわく付きの問題児だった  
なんだか哀れみにも似た、私達に似たものを感じた

（厳しい灯判定ならこれは弾かなくても却下かなあ  
）

そう思つたときだった

「あたしに弾かせて下さい」

（え？）

驚いた、意外だった

灯は唐突に言い、そして今日自ら初めてギターを握つた

パイプ椅子に座り、出来損ないのアンプにケーブルを差した

(？、「なんで、なんでわざわざ売れ残りのアンプなんか？」)

わざは店員さんの話しひを聞いてなかつたのか

はてなマークいつぱいの私をよそに、灯はボリュームダイヤルをほんの少しだけ上げる

すると、アンプはたちまちジーッと大きなノイズを立てた  
いつでもいいぞ

まるで今にも音を出したいとばかりに、残念判定を覆したいとばかりに言つてゐる気がした

次の瞬間、それに答えるよつて、白色のピックがピンと張つた六本の弦めがけて豪快にスイングする！

俺は不良品じやねええッ！

埃が払われ、落ちこぼれが火を吹く！

ギャイイイインツツーー！

「 ツーー？」

今まで押し殺していた分ありつたけを躍動感「ツーー！」に叫んだ

周囲の空氣は瞬く間に吸い寄せられる

「び、びっくりした…」

第一声に、終わってもまだ耳元にわんわんと反響して残つてゐる「さうなんですよ、サイズと音だけはいいんですが、今みたいに荒いと言いますか、纖細な音が本当に出しきらしにアンプなんですよましてやア」「ギニは…」

「やつぱりやつですか」

「はい、なので、やつぱり最初に選んだいじりのせつない

「…こや

説明をする店員さんの声を切り、灯は一人真剣な眼差しで聴いた

「あかり??」

ギターのネックを握つたまま、ただじつと誰にも買われないその売れ残りアンプを見つめて

「どうが、お前もなのか…」

「お前も、落ちこぼれ、なのか」

そして、続けてリーダーは勧誘するよひに細々と漏らした

「どうある?、一緒に行くか?」

「え…、でもほりいれ、あんまり良くないからじこよ、私にはよくわかんないけど」

トントン拍子で勝手に進む灯に、店員も横であつたからんとしている

大袈裟に手なんかを振つて私も先程店員が使つた言葉を繰り返した

「ア」「ギ?だつけ、には向いてないらしいよ?」

多分、私なりに最低これよりは性能が良い物はあると思つたから

一般的冷静な意見に言つてみた

でも、灯は違つていた

「ゆり 知つてる?、ギターの感動つてや、上手い下手でもなくて、不思議なことに楽器の性能でも、ましてやテクニックでもないんだ

」

(?? なんの話?? )

「えつと、じゃあ…なんなの?」

きょとんとすると、灯は次で全ての疑問をねじ伏せた

「‘化学反応’ 弾き手の伝えたい感情が乗つた声、そんでもそいつを叫んでくれるアンペ」

(……化学反応 )

「あたしは、それはこいつだと思つんだ こんな爆音しか鳴らせない取り柄一つの落ちこぼれが、きっと鳴らしたかった音が、あたし達の求める感動とピッタリ相性が合つてると思つたんだよ」

その言葉に、不意に首筋にゾクリと爽やかな鳥肌が立つた

「有珠には、有珠の鳴らす無茶なギターをフォローしきれんのは、  
こいつの音だ そんな気がする」

常識に囚われる事なく、灯はにかつと笑つて言ひきつた

「こいつも同じ、今が最後のチャンスなんだと思つ、だからこいつには、その一瞬にしか出せないガツて爆発的な勢いが備わつてゐる」

「ゆりはさ、そんな気しない？」

淀みなく真つ直ぐに、彼女は瞳を輝かせて発した

キラッキラに眩しかつた

その若い言葉と空氣に触れて、また胸の奥でドキドキが押し寄せて  
る自分がいた

（……）

なんでだろう、今までの自分達の経験からかな  
説得力のある灯の説明に、確証のない自分たちの世界がこんなにも  
すんなり開けた気がしたんだ

大事な何かが、この古びたアンプには宿つてゐる

そんな気がして、だからさ、無意識に私は気がつけば言つていた

「そうかもね、なんだろう、私もそんな気がするよ」

少しだけ空気を多く吸つて、頷いていた

落ちこぼれ同士、たつた一人を救う為だけにがむしゃらに音をかき鳴らす姿が

不思議なほどしつくり、目を閉じると鮮明に描けてしまったのだ

……

最後まで店員さんは「本当にこれでいいんですか？」と繰り返し角も欠けて埃も被つたそれだけでは申し訳ないと思ったのだろうか

購入するぎりぎり、親切にアンプ用ソフトケースまでセットにして付けてくれた

一見すると旅先に持つていく小さめのキャリーバックにも見えるそれは

下に小さなキャスターが四つ付き、引いて持つていく為のキャリー ハンドル付きだ

側面には普通にカバンみたく持つ為の太い手持ち紐も付いている無理をすれば背負つたりも出来そうだった

「あつ！ 忘れてたぞー。」

「え？ まだ何があるの？」

お会計を済ませる間際、灯はハツとしてそのまま慌てて足音を鳴らして何かを取りにいった

後ろのお姉さんが睨みを向けて、いかにも苛立つている

「す、すいませんつ これも追加で！」

帰ってきたその手に握られていたのは、見覚えのあるものだった

（これって……）

よく覚えている、いつかアマリリスを入れた、あの改造前のソフトギター・ケースだった

そして、手荷物いっぱいに、私達は楽器屋を後にした

「といひでこのアンプ ビニール持つていいくの？ 日だまつ喫茶？」

そして灯は目一杯右腕を高く掲げ、全身を使って指差した

「……」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5708v/>

---

まぐろ剣士 -Rein:carnation-

2011年11月17日18時38分発行